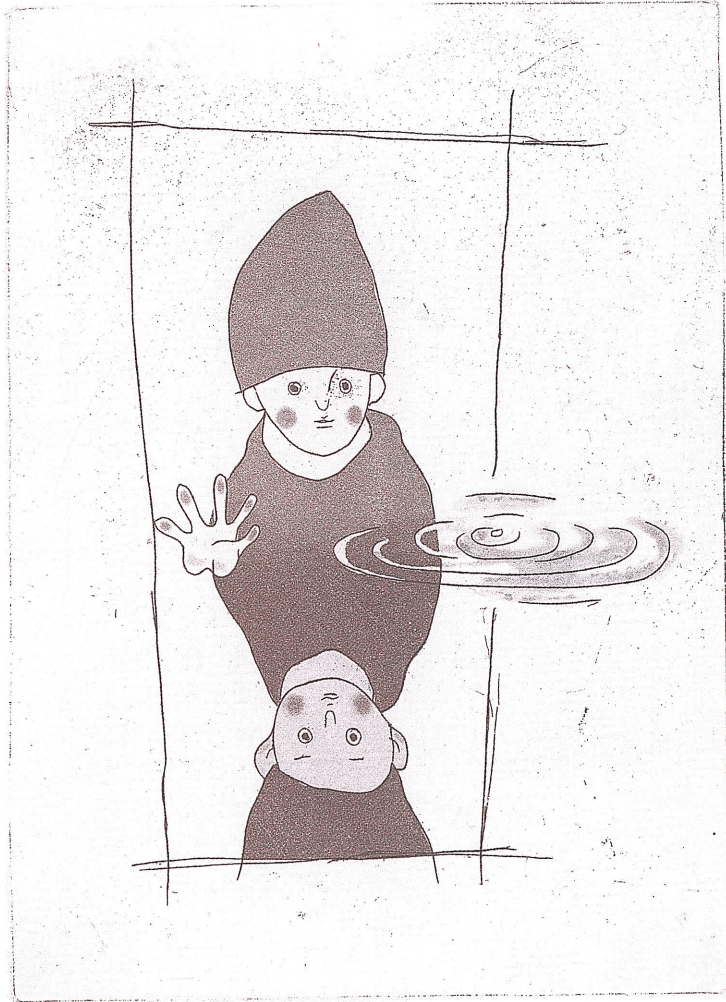


幼 児 の 教 育



家庭・保育所・幼稚園

5
2005

好評発売中!

もう一つの子育て支援

保護者サポートシステム

友定啓子・山口大学教育学部附属幼稚園／著

豊かな子育てのための
„保育参加“ガイドブック



AB判 96頁 定価1,995円 (税込)

保護者が保育に参加することで、保育が豊かになり、子どもが豊かに育つと同時に、保護者も成長していきます。保護者による「保育参加」を“子育て支援”の目でとらえ、園や保育者が、保護者とともに子育てをしていくことがどんなに大切なことを、具体的な事例とともに明らかにしています。巻末に「保護者成長支援プログラム」「保育参加ガイド」を収録。

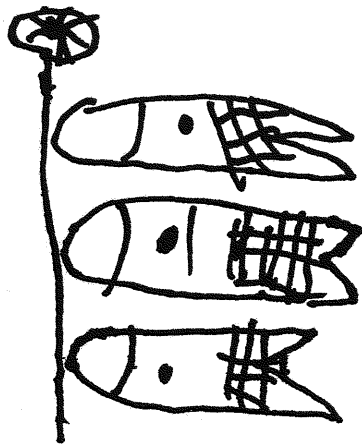
キンダーブックの

フレール館

くわしくはフレール館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育

第104巻 第5号



幼児の教育 目次

— 第一〇四卷 第五号 —

© 2005
日本幼稚園協会

巻頭言 「ままごと遊び」から考えたこと……………秋田喜代美…(4)

十文字学園女子大学講演会

『新しい時代に生きる子どもをどう育てるか

—教育における発想の転換—(1)……………首藤美香子…(8)

中・高校生の「親性」^{おやまい}を育む……………伊藤 葉子…(18)

観察者のノートに子どもが描くものは？……………砂上 史子…(26)



育てる者を育てる「保育者養成」の課題……………塚田 幸子…(35)

たけのこ幼稚園とラジオのおっちゃん(2)……………庄籠 道子…(44)

十八世紀ドイツの子どもの本(3)

エアフルト版『子どものメルヘン集』……………佐藤 茂樹…(50)

障碍をもつ幼児の保育(32) —この子と出会ったとき—

この子と生きるうえで大切にしてきたこと(4)……………津守 真・津守 房江…(59)

表紙絵／中井絵津子

扉題字／津守 真

扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット／彌永たたえ「黒い芯の鉛筆」

編集委員／浜口 順子・佐藤 寛子・吉岡 晶子

編集部／河合 聡子

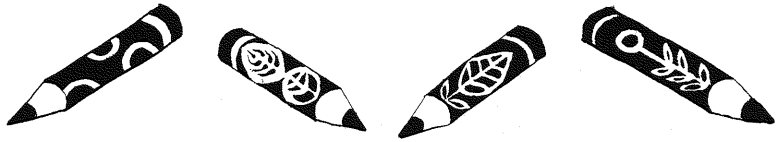


巻頭言

「ままごと遊び」から考えたこと

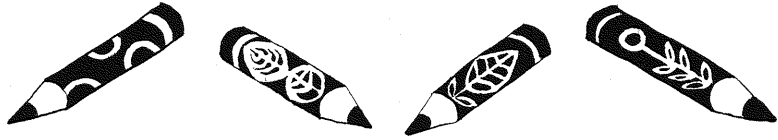
秋田 喜代美

ごっこ遊び、中でもままごと遊びは、どこの園でも環境として準備されているものの一つといえるだろう。「みたてが生じる物」と「状況設定」、「出来事のプラン」、「ごっこの役割」によって、この遊びは発生する。一園で一年間ごっこ遊びコーナーで遊ぶ子どもたちが相互にどのようなようにしてごっこの役をとっていくのかについて、集団内での変化を縦断的に追って観察研究（増田・秋田二〇〇二、秋田・増田二〇〇二）をしたことがある。とりたい役を主張できる子もいる一方で、仲間の中での力関係が固定し役が主張できない子どもの発達と関係性の変化をとりあげた研究であった。先日そのビデオを一緒に見たり論文を読んで、保育者の先生方と話し合う機会を得た。そこで先生方と話し



合った中で私の心に残ったことを、本稿でも考えてみたい。

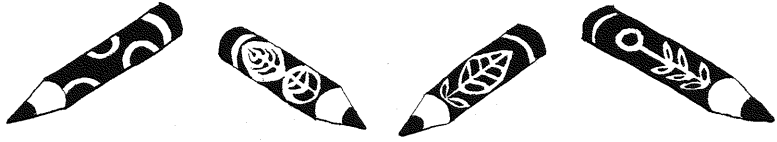
一点は、近年の傾向として、ペットになりたがる子どもが増えている、おかあさん役になりたがる子どもが少なくなってきた、ましてお父さん役においては遊びの中に登場してきたとしても、会社に出かける人や食事をする人としてしか演じられないという、ままごとの役をめぐる変化である。この変化は実は他の研究会でも指摘された話題であり、特定の園だけの傾向ではなくなってきたようである。ペットというのはケアされかわいがられる存在であるが、遊びの中での役としては叱える、甘える、動くなどあまり活動性や新たな発想ができてにくい役回りである。それを喜んでやってみようとする子どもたちはどのような心理をもっているのだろうか。思いっきり甘えてみたい心理や友人関係の中でも楽な遊びをしたいという思いだろうか。あるいはどこかでペットになりたい願望だろうか。実は子どもはとても楽しんでペット役やふるまいをやっていたりする。しかしわが子が紐でつながれたりして連れられるペットをしているのを親が見ると、心安らかではいられず、連れる者と連れられる者の関係に目がいき子どもが遊んでいるというのを忘れてしまう親も時にいる。ある先生は、「ペットにつける飾りを工夫したり、紐はやめようねと言ったりはしますけど」と言われた。また多くの保育者の方は、このような時に「他の遊びや役もやっているのですよ。だから大丈夫ですよ」と親に説明すると言われた。各園でこのような場面をどのようにみるか、どのように親に語るかを話しあってみることも子どもの心を探る一つのきっかけになるだろう。



母親が子どもたちにとって魅力的に映っていないことや子どもから見える父親像の貧困さを表しているようにも思える。家庭生活のおもしろさが子どもに見えにくいことが遊びの広がりや狭めているのかもしれない。

この点とも関連して、二点目に、園でのごっこコーナーの環境としての物の出し方や場の設定が議論された。園によって比較的長期的に同じ場所にコーナーが作られている園もあれば、オープンなスペースで特定の場所がない園もある。もちろん学年や一年間の中でもどの時期であるかによっても環境設定は異なっている。この園では同じ場所と比較的同じような物での遊びが継続していた。それが友人関係の固定化を招いていないか、変化を生み出すものがあると遊びの質が変わったのではないかという視点であった。そのビデオの園の先生は力のある先生で、日頃から保育環境もよく工夫されている先生である。先生にとつての主活動ではいろいろな工夫をされているのである。しかしむしろ日常化しているコーナーは、子どもが安定してしばらく遊ぶ場としてあまり重視はされていないように見えた。子どもも遊んでいるから安心しておられるのである。そしてその先生なりには様々な食べ物の素材が粘土から毛糸に変わったたり鍋も加わったりと変えているのである。でも子どもと他者との関係、他の遊び集団との動線等基本的活動はあまり変わっていない。

子どもと他者との役割や出会い、関係性、活動の展開を変えていく環境設定と、目先の素材は変わるが活動や関係はあまり変わらない環境設定がある。たとえば牛乳パック



での電車作りがお菓子箱の電車作りになってもその素材は遊びの中での物との関係、人との関係をあまり変えないことが多い。しかし列車を相互につなぐゴムテープや線路になるテープやダンボールは子どもたちの遊びの関係を変えていく。砂場のバケツやスコップの材質が変わると新奇性は増すが砂や水との関係はあまり変わらない。しかしそこに桶や棒がでてくると活動の環境は変わってくる。出来事のエピソードが複雑にからんで発展してくるのである。毎日生ける花が変わっているので環境としては変わっている。しかし花に注意しない子には変化はない。しかしそこに関係する絵本がおかれたり、その花の成長の写真がおかれ目にとまることで、子どもと花との関係は変わる。メインの活動の環境と同時に、日常的な環境の中で、物や場と子どもとの関係を遊びの展開と共にどのように変えているかをみていく視座は、日常の環境を大事にする保育において大切なことではないだろうか。

(東京大学)

引用文献

増田時枝・秋田喜代美『遊びの開始時の「役」発生・成立スタイルの検討』保育学研究40(1)、七五―八二、二〇〇二

秋田喜代美・増田時枝『ごっこコーナーにおける「役」の生成・成立の発達過程』東京大学大学院教育学研究科紀要41、三四九―三六四、二〇〇二

十文字学園女子大学講演会

『新しい時代に生きる子どもをどう育てるか』

—教育における発想の転換— (1)

首藤 美香子 編

暮れも押し迫った二〇〇四年十二月、堀合文子十文字学園女子大学客員教授・本田和子お茶の水女子大学学長をお招きして、十文字学園女子大学にて、特別講演会

『新しい時代に生きる子どもをどう育てるか—教育における発想の転換—』が開催されました。保育の現場や研

究において長年にわたりご活躍なされた両先生の、豊かな経験からあふれる貴重なお話の数々を、数回にわたり、ご紹介します。今回は堀合先生のお話です。

堀合先生は東京女子高等師範学校にて倉橋惣三に師事された後、一九四〇年より同附属幼稚園（現お茶の水女

子大学附属幼稚園)にて保育に従事され、教頭を務められたのち、一九八六年にご退官後は十文字幼稚園の主事として二〇〇四年三月まで、実に半世紀を越えて保育の第一線で多くの子どもたちのご指導にあたられてきました。今回の講演では、聴衆の多くが保育関係者であることにご配慮され、慎重に言葉を選ばれ直截な批判となることを巧妙に避けつつも、堀合先生の実感として、近年の子どもは確実に昔と異なること、その現実を保育者はどれだけ自覚しているのか、また新しい時代に見合う保育を構築するため日々十分努力がなされているか、強い危機意識に基づいた問題提議がありました。

少子化に伴う子どもをめぐる人間関係の変化、大量消費と情報化が加速する社会、学校や家庭、地域の教育力の低下、児童虐待や犯罪の多発など生活環境の動揺など、混迷する近年の保育状況に対し、保育現場では問題解決に向けた様々な取り組みが模索されてきています。堀合先生の厳しいご指摘は、保育者が「新しい時代に生きる子ども」をどのように理解し、保育の根本は堅持し

ながらも日々の実践のあり方をどう改革していくべきか、まさしく発想の転換を迫るものであったといえます。それに対しては様々な立場から異論もあるでしょうが、子どもと大人の関係再構築をめざす方々の実践の一助となると思われます。紙数の都合で、内容が重複する後半の三分の一は割愛させていただきますが、現場という具体の地平から敢えて離陸せず、日常の平易な言葉でもって重ねられる深い思索の道程を、読者の皆様にも追体験していただければ幸いです。(以下講演内容)

子どもは変わったという実感

私にも若い時がありました。ずっとやっておりました。長いものですからね、いろいろなことをいたしました。昔は……今とは全然違いますから。こちらからいろいろと「今日はこうしましょう」「その次は、みんなで椅子を持ってきて、ピアノのそばにきてね」とか、「今度は広いお部屋に行ってお遊戯しましょう」と言っていて、『みんなで』、いわゆる『みんなで』ですよ。先生の

方が考えた計画をいろいろと一日の中でやっていく、そういうのが私の保育でしたね。いろいろな物ができてみたり、絵本を持ってきてお話をしたり、そんなことは、先生方はおわかりだと思えますから、いちいち申し上げませんけれど。そういうのが私の若い時のお子さんに対する保育だったのです。

時代がどんどん変わってきますと……今のお子さんは全然前と違う、当たり前ですわね。それこそ、私が何十年の経験がありますから、その間に変化しないというのはおかしいので。それこそ、私が三月までさせていただけだったので、そのお子さんというのは本当に違っています。「おかしいな、これでいいのかな」、と思いつながら過ごさせていただきましたけれど。それこそ若い時代は、みんなで座ってとか、おにごっこしてみたり、一緒になって滑ってみたりブランコに乗ってみたり、そういう方が良い先生だったわけです。それが、お子さんにも、決して間違いでなかった。ところがこの三月では、それだけのギャップがありまして、一緒に遊ぶんですけれ



ど、それよりも、もっともとお子さんの方がいい考えをして遊んでくれる。私が何も「おにごっこしましょうよ」なんて言わなくなつて、ちゃんと自分たちで考えて遊ぶ。

でも、それは入園当初からそういうわけではないのですけれどね。年毎に、対し方を変えていかなとお子さんが逆に変な顔をして見ますから、私が何か前と同じにやっていたのじゃダメなんだと、「もう嫌」というほど、お子さんの方から教えてもらってますから。ですからそういうことはできないわけです。それで、私も最後のクラスは三年間持たせていただきましたから、三歳から、「あら、今度の人たちは何だか違うわ」、と思つて一緒に生活していて……あの、それが今申し上げたような、

もちろん先生の計画の方向へもってゆくこともせず一緒に
行かない方が何かいいみたい。

今日の幼児教育のむずかしさ

そのかわり、ただ、ご存知だと思いますが、幼児教育
は『遊ぶ』という生活が一番大事で、それが根本でござ
いますから、それはもうちゃんと踏まえて、そしてその
遊ぶお子さんたちの生活をみていても、前に申し上げた
ような形で私どもが出て行き一緒に遊んだりするといけ
ないこともわかりました。今度出ていかないという傍
観者立場になって、何もしないでただ見てたんじゃ、
我々の仕事というものは無くなってしまいますね。だか
ら、そこらへんが、まあ、大変むずかしくなった、(むずか
しい)幼児教育になったということをすごく感じました。
ただ黙って、お子さんが、けがをしないように無事に
遊んでいるなど見ているだけ、外観からだで見ているだ
けに見えるのです。だけでも逆に、その神経の使い方
が、それこそ頭の上から足の先まで全部の神経を使って

いかなないと、今のお子さんたちはダメなのです。何しろ
体を使って一緒に動いていくのじゃなくて、体は
使えけれども、こちらの保育者の使い方が違うというよ
うに変化してきました。

もう一つは、一人ひとりと相対していくというのが根
本の問題ですから、私は(昔から)同じようにやってい
たけれども、(今は)何かこちらに要求してくることが
違う。それは、いろいろな面で先生方もご存知かもしれ
ないけれど、(今のお子さんは)何でもやってほしい。
今まではというより昔は、お子さんに何とか上手に、こ
ちら側からさせられているという形じゃなくても、知ら
ないうちにお子さんの方が、自分でいろんなことができ
るようになるような方向にもっていくというやり方で
やってきました。が、今のお子さんはそれでは満足しな
いで、「もろにやってほしい」という目を私どもに向け
ますものですから。それが一番、最近のお子さんを感じ
たことです。

別に、「あなたにできるでしょ」「やってごらんなさ

い」「ちゃんと見てあげることね」、そんなことは昔の話で、今は何でも。というのには「朝、おはようございます」と来て、今の時期でしたら、コートでも何でもそれこそ何の抵抗もなく、言葉も言わないかもしれないけれども、脱がしてあげて「さあ行きましょう」と。そのへんに、今と昔の違いがあるのですね。

無条件に何でもしてあげて、

『心から心でもって、心を育てる』

それだけ今のお子さんというのは、世の中が騒がしくなつて、お子さんにも生まれた時からいろんな刺激が押し寄せているので、お子さんの方も本当に神経をとがらして成長してきて、そしてまた、いろんな面も吸収も早出し、そこいらが随分違っているのは当然なんですけども。それをすごく感じたので、途中から、何でも私が無条件に（この言い方は無責任かもしれないけれど）、無条件と同じくらいに何でもしてあげましょう、「やって」と言ってくるのは当然、やってあげますけれど、ちょっと

と困っているような時でも、手を貸してあげる。ちょっと忘れていようなことも、「みんな忘れてるんじゃない」「忘れてるわよ」ではなくて、全部こちらがしてあげる。

これはどういうことかというのと、お子さんが何かを本当に訴えているような感じを受けたので、今のお子さんというのは、いろんなこと、表面のことを教育するよりも（こういうことをうまくいえないですが）、本当にお子さんの心、お子さんの心はすなわち人間の心ですから、心、というものは何か随分生まれてからすぐいろいろな刺激を受けて何年前よりも、はるかにたくさん刺激を受けて育つてますから、それだけ「心というものが満足して育つてはいないんじゃないかな」、ということを感じましたものですから。まず私は、「今のお子さんというのは、心を育ててあげなければならぬのじゃないか」。それには、私ども保育者がまず心を、もちろんこちらにも修養しなくてはいけないが、『心から心でもって心を教育していく』というような、こちらにも気持ちを持

十分に出してあげて。極端に言えば、それしかないみたいなように今は考えている。今振り返ってみると、極端だったのかなと思いますけれど、今は、こういう世の中ではそれがいいと自分なりに考えております。

昔の保育と今は違う、

そのことを自覚してほしい

昔の保育とは違う、ということなのです。今は『何を『する』ではなく、お子さんが園に来て自分の生活を十分にしている、その中で必要なことだけを私どもが保育者としていけないことはいけない、良いことは褒める、そんなことはちゃんとして、後は『ほとんどお子さんからの要求を十分に受け入れてあげる』。今申し上げたみたいに、必要な、例えばコートのことのように、こちら（保育者）が気を利かせてやるといふことです。口でもってお子さんばかりさせるのではなく、させるといふことは、いろんなやり方があるが上手にやればいいのでしょうが、いくら上手にやっても現代のお子さんに大して必要

ないと思います。

私が若い時していたようなことは、（今も）保育室の中にいっぱい見られる。「それでいいのかしら」と、時々生意気なことを思っていますけれど。それくらい今のお子さんは変わってるんです。ただ、「変わってる、変わってる」と言っても、やっぱり何かそこには幼児教育というものがちゃんと確立していかなくちゃいけないのですけれど。ただそれがはつきりと前にでません。

……だから私は、とてもむずかしいと思います。逆に、前に比べてね。「してごらんなさい」ということは言わないまでも、何となく優しい誘導していくやり方にしても（そういうことは易しいです）、だけどそういうことはしないで、お子さんの方から出るのを待ってて、それに對して、一生懸命、それこそ小さなことがだんだんだんだん発展していくところまでもっていつてあげるといふやり方はとてもむずかしいと思います。相当保育者がある頭を使って、神経も使って、体が先だったです。そこからへんが、私は言葉としてお話するのもむずかしいけ

ど、やる方もむずかしいです。だから、いろいろなお話をきいて、背後にいらっしやるお母さまたちから要求があるからとか、何だからとよく伺いますが、私はそれよりもお子さんが大事です。

保育の根本は変わらない

本当に今なら今の教育をしておいてあげないと大変なことになります。さつきから、『心』、『心』、と。

『心』は見えませんがね。私どもに見えないから、それを見ようとする、そこにもうまざるむずかしさもあるし、そこを大事にしてそれを満足させてあげて、それから、それでいて『お子さんたちが自分からいろいろ考えて行動していくような人間』に向かつていってほしいな、その人間に幼児期にすつかり完成するわけにはいかないけれど、そういう方向に向かつていってもらったらいいいじゃないかなと。自分からいろいろと考えて“というの、根本の問題でこれは昔から変わりません。同じですが、特に今は割合とさつきも申し上げてしつこい

ようですが、いろんな情報もあるし、いろんな音もあるし、いろんな言葉もあるし、いろんな物がある中の方たちが赤ちゃんから育てていますから、割と受け身が多い。だから園に来た時くらいは『自分というものを出す』ような機会をこちらで作ってあげないと、それこそ大変な人間になって、判断もつかない、自分たちの頭で考えることもしないような、それから人の指示を待っているような、極端に言えばそんなようなお子さんができてしまいますから。

特に今は（昔もそうですが）、根本の目的は同じだが、そこがお子さんが違うというのは、そこにあるのですから、我々の努力の仕方がだいたい現場では違っていかなくちゃいけないのじゃないかなと、いつも思っております。それで『目に見えない物を大事にしなくちゃいけない』、これも昔から大事にしていけないわけではないけれど、特にそこを大事にしなきゃならない今の時代にきているということ（です）。それを見抜くように、各自努力しなきゃならないことです。

心を見る、

具体的に何を要求しているか見抜く

『心』、『心』とばかり言っておりませけれどそうじゃない、具体的に何を要求しているんだろうということを、一生懸命見抜くためには、私の場合、それはお子さんを見なきゃなりません。本当に今の時代は、何とこのでしょう。お子さんが、すごい……先生に対して乱暴。普通のお子さんのクラスですよ。乱暴ってね、わざと自分に向けてほしいわけですから、ぶつというわけではないですけど、足でやったり、お友だちにやられるとちよつといろいろな大変だし、だけど、我々にやってくれる分にはいいのですけれど、口に出して言ってくれればいいのですけれど、以上のような形でもって、お子さんたちは、「まだ先生たちはわからないのか」「こういうことを頼んでいるのに」と、口で言わないで、私どもが考える以上のことを考えてやってくれます。

でも一応、こちらから、やつぱり『向こうが心として

要求しているならば、こちらも心でもって返してあげないとお子さんも育っていかないんじゃないかな』。(中略)『心』だとか、いろいろ言いましたけれど、目に見えないお子さんとのこと、私どもと見えないつながり、つながりならいいですけども。つながりもできないでやったら大変なことだしね。何か、そこには火花が散っていると思うのです。特に今のお子さんはね。先生に対してけつたり、乱暴してみたり、先生がわかってくれないと思つてやつていられるのかもしれないし、そこらへんはわからないですけど、それを見抜いていくのが私どもの大きな仕事だと思います。(以下略)

◇司会者からの質問

「なぜ、堀合先生はお子さんの訴えが見えるのですか。なぜ、子どもたちは堀合先生にはそこをあらわしてくれるのに、他の先生方は気付かず、そのことに抵抗も感じないで過ごしてしまっている(のでしよう)。堀合先生はなぜ、(子どもの訴えが)わかるのでしょうか。極意と

いいですか、これからの若い方々に、堀合先生のような感性が持てるためにどんなことが大事か補足を」

保育者は『無』になること、

『自分を意識しない』ということ

これは、すぐにできるわけではない。担任の交替があるので仕方がないということは知っていますが、一番普通のやり方は三歳・四歳・五歳と持つのが普通と思っておりますが、その場ですぐできるそんな神様みたいなことはできない。お子さんが入園した時から覚悟して、と言ったら、おかしいですけど、覚悟してお預かりする。いろんな細かいこと事務的なことも。ずっとつなげてみて、つなげなくても、一日でも、お子さんと対する時の保育者の心構えは、『自分を意識しない』ということ。

『無』という言葉がありますでしょ。どの保育者だからどうというんじゃない、お子さんを預かったら保育者は、



無にならないとできない。自分を無くす。「おはようございます」と一人来た時から保育は始まる（全員来てからということではなく）。

保育者とお子さんの関係が、『無』でないとなかなかできない。自分を無くしてお子さんをよく見る。よく見るだけでなく、幼稚園ではいろんなことがある。ここだけ見ているだけじゃダメ。後ろにも目がないとダメ。横ももちろんそうだし。それが頭の先から足の先というわけで、背中にも神経がないとやっていけない。使っていると自分というものは無いんです。だけど本当に無くなつては、それはかえってダメになるかも知れませんが、ここは解釈して頂きたいのですが……。

まず、子どもと通じること

「先生、電話ですよ」とか「ああそう電話」なんて言っ

たら大きな穴が空いちやいますでしょ。そのことだけを
考えて一日を過ごさないと、『お子さんと通じる』こと
はできないのですよね。お子さんと通じることがまずで
きないと、そこに教育がでてこない。お子さんが（入園
した）四月のはじめから努力して。はじめはお子さんの
方がそっぽ、知らない人ですからね。振り向いてもくれ
ません。振り向いてもくれませんよね。振り向いてくれ
ない子どもを、一人一人つながりができるように努力す
ること。これができれば、『無』になることができる。
私の方を見てくれるお子さんの方も努力していると思っ
ます。

自分を無くさないと、それだから見えるということでは
ないが、何か感じてくるのだと思うのです。「こうか
な」、「ああかな」と、こちらも働かせて、ただ見ている
わけにはいきませんから。「こうかしら」、「あの人はこ
うなのかしら」と、こちらがわからなければわからない
ほどそういう努力をしてみないと。「ただ、こうだから

こう」、じゃなくて、やっぱり自分というものをいろいろ
る保育者自身を変えていって、「やってみただけど良いか
しら、やっぱりダメだ」と考えたり想像したりしてい
かないと。はつきり見えて、「さあこれをいたしましょう
じゃない」、ということのはわかるのです。

保育者はお子さんの持っている能力をそれぞれ引き出
してあげるのが最終の望でしょう。能力を種々使わせる
のは幼児期には必要ないのですが人によってはそろそろ
自分の能力を使い始める場合があるので、それをよくみ
て、よく感じて、次は我々先生の頭を使つて処理すべ
きでしょう。

人間としてお子さんの方がはるかに時代に合わせて進
歩しているので教育の場ではそれをこわすことなく、引
出し伸ばす方向に持つていくのが私どもの今の幼児教育
ではないでしょうか。

中・高校生の「親性」おやせいを育む

伊藤 葉子

「親になること」をとらえ直す

最近、親子関係をめぐる深刻な問題状況から、親になる前の段階から「親になるための資質」を育むことが大切ではないかという意見をよく聞く。ただし、保育学を含む関連の学問領域においては、親になるずっと前のやっとな「子ども」から抜け出たばかりの段階である中・

高校生の「親になるための資質」の育成には、これまであまり目をむけられてこなかった。

実際には、学校教育という場で、戦後この役割を担ってきたのは家庭科の保育教育である。ただし、男女が共に家庭科を学ぶようになる前は、女子だけを対象にした母親準備教育として、結婚して子どもを生むという女性の生き方を前提として「母性」の育成が目標に掲げられ

てきた。しかし、多様な生き方が認められるようになってきた。

た今、中・高校生に対し、「親になること」が人間のあべき生き方だよといって、保育を教えることが難しくなってきた。また、子育ては母親の役目とされてきたけど、これからは、子育てにおいては、父親・母親が協力することが大切だと話す時に、父親は父性で母親は母性なのか、それとも父性的・母性的な要素を父親も母親も備えなくてはならないのか、そもそもどのような要素が父性または母性なのかということで、教師の方に戸惑いが見られる。ましてや、現代の中・高校生は、それぞれの親との葛藤の中で暮らしているのであり、自分が親になることは遠い将来のことだと思っており、親役割のことを話してもピンとこない。つまり、中・高校生に「親になるための資質」を育むことの重要性をわかっているが、どのような資質を育んでいくのかということ、ここで、しっかりと考え直さなくてはならない時期にきているのである。これは家庭科の保育教育だけの課題ではなく、関係領域全てにとっても重大な課題だと考

える。

ここでは、この課題について、「親性」という視点から意見を述べていきたい。紙面の都合上、なぜ「親性」という用語を使うのか、そして、どのように「親性」を育んでいくのかの二点を中心に書くことにする。

「親性」おやせいって何？

「親性」という用語が最初に使われた背景を探ると、いわゆる子育ては母親の役目とする伝統的母性観から脱けだそうという動きのなかで、生まれてきている。つまり、母性に関する議論が、父性・母性をめぐる議論へと発展するなかで、両性が備えるべき資質を強調した用語だととらえられる。もともと、父性と母性という用語をめぐる議論は、それが父性という機能・母性という異なった機能を持つ前提（二元的）のもとで繰り広げられてきている。対して、「親性」という用語を用いることは、親の役割を果たすことにおいて、父性・母性という異なる機能を考えることはしないということになる。こ

の意味において、育児性・養護性という用語も同様の特徴を持っていると言えるだろう。

ただし、親として両性が備えるべき統合された資質として「親性」を提示するだけでは、どのような資質を育成していくべきかという課題に応えたことにはならない。もう少し具体的に、「親性」について私なりの考えを述べていきたい。

「育児性」という用語は、子どもを生み育てることは男女両性の広義の養育欲求・養育行動として把握されるべきだという主張のもとに提唱された²⁾。「養護性」は、養育にあたる人間に限らず、相手の健全な発達を促進するために用いられる共感性と技能と定義されており、これは子どもであっても備えていくべきだとも論じられている。言いかえれば、「育児性」は「性別」からの脱却を、「養護性」は「血縁」「世代」からの脱却を図った用語だととらえられる。この「性別」「血縁」「世代」というキーワードでみていくならば、私は「親性」は、「性別」「血縁」からの脱却を図るが、「世代」という枠組みを

もつべきではないかと考えている。つまり、男女という「性別」や、自分の子どもに限定される「血縁」にしばられるものではないが、次世代を育成する社会の一員としての自覚と責任（「世代」）に基づいた資質だという考え方である。

まとめると、「親性」を「次世代の再生産と育成のための資質」ととらえ、この資質には、親としての役割を果たすための資質だけではなく、親とならない場合であっても、次世代の誕生と健やかな発達を支援する社会の一員としての備えていくべき資質も含まれるというのが私の考えである。

さらに「親性準備性」って何？

このような考え方に基づいて、私は、さらに「親性準備性」という用語を提示したい。これは、私が中・高校生の保育教育を専門としている立場から、親性の育成を目指した上で、目の前にいる中・高校生にはどのような資質を育むのかという点を明確にすることが必要だから

である。この準備性という用語は、親自身が発達する存在なのだという理論の延長線上に生まれてきている。なぜならば、発達する存在として親をとらえることによつて、その資質の形成過程としての「準備性」という視点を生み出すことにつながったからである。

ここで、親性準備性という用語は、すでに述べたような「親性」の形成過程において、段階的に形成される資質と定義することにする。教育というのは実践的な営みである。何を目標とするのかを明らかにした上で、それでは、今の目の前にいる生徒たちには、そのために何をしていけばよいのかをみつけないかなくてはならない。だから、「親性」という指標と、今の中・高校生の発達段階にあった「準備性」のどちらも大切ではないかと考えた末に、その二つを単純につなげた「親性準備性」を提示するという結論に達した。

中・高校生の時期に育むべきことは？

話が前後するが、「親性」とは、必ずしも親になるこ

とを前提としないという点について、もう少し説明を加えたい。というのは、教育的見地からみると誤解を招くかもしれないからである。少子化が進む中で、社会全体として出産率をあげていくべきであり、子どもを生み、育てることの意義を伝えていくことは保育教育に期待された重要な役目でもあるだろう。しかし、その役目を果たすということは、親になる生き方を人間のあるべき生き方として、刷り込むことなのだろうか。私は、中・高校生一人一人が、多様な考え方や価値観に触れる中で、自分の生き方を模索する過程において、彼ら・彼女らが親になることを自ら選び取っていくことを支援することが保育教育の役目だと考えている。同時に、たとえ、親にならないという生き方を選んだとしても、次世代の子どもたちの誕生と健全な発達を支援する保育環境をつ



くつていくのは社会全体の責任であることを知り、自分も親世代の一員としての責任を果たしていかなくてはならないということを読んでいけるような保育教育でなくてはならないとも思う。

家庭科の保育教育は、良妻賢母教育の一貫として結婚―出産という女性の固定的生き方を刷り込むような教育をしてきたという歴史的背景をもっている。そして、今、少子化が進み、その教育的対策として、家庭科の保育教育への期待が高まっていることに、私は喜びも感じているが、出産率をあげるための手立てに終わってしまつてはいけないという思いも強い。

最近、中・高校の家庭科の先生方と保育教育に関する話をする機会が多いが、先生方から共通に出てくる言葉は、「生徒たちは将来のことをまだ具体的に考えられない、特に中学生では難しい。なぜ、今、保育を学ぶのかを説明できない」「今の生徒たちの中には、複雑な家庭事情を抱えている子も多い。自分の親への反発も強い。それなのに、あなた方が子育てをするときに……:という

ことで話を進めてもしらけてしまう」などである。

つまり、私がこれまで述べてきた「親性」「親性準備性」のとらえ方は、まさにそのような生徒たちと中・高校の保育教育の現実から出てきたものなのである。そして、それ故に、中・高校生の発達段階においては、「今、現在、他の人に対する受容性」と思いやりを備えた個人であるための資質」の育成が重要であると思う。この「他の人」とは、実際には「子ども」ということになるのだが、「子ども」を通して、他者全般への受容性と思いやりを育んでいくという視点もつこと、その上で親性の育成を目指すことが大切だと思う。このような視点こそが、なぜ、中・高校生の時期に保育を学ぶのかという疑問への答えとなるだろう。

中・高校生と子どもとの触れ合い体験の意義は？

それでは、どのようにして中・高校生に「子どもへの受容性と思いやり」を育むのかということになる。その具体的な取り組みの一つとして、ここでは、子どもと

中・高校生との触れ合い体験（保育体験学習）について紹介する。

子どもとの触れ合い体験が子どもへの興味を高めること、その後の保育学習への意欲が増すことは、すでに数多くの実践報告から明らかにされているが、ここでは、もう少し詳しく子どもと触れ合うことの意義について考えてみたい。

まずは「小さい子について知る」ことである。幼稚園や保育所にいくことを話すと、中には「いきたくない」「子どもはきらい」という生徒もいる。理由を聞くと、「うるさいから」「めんどくさいから」という。日頃、小さい子と触れ合う機会が少ない中・高校生は、自分たちの生活と距離のある子どもたちの姿に対して、ある意味では間違ったイメージをもっていると考えられる。「うるさいから」といったある生徒は電車の中ではしゃぐ子どもをみたり、泣き叫ぶ子どもとすれ違うなどの場面の積み重ねによってイメージを形成したようだ。その生徒は、体験後「よく考えてみたら小さい子のことよく

知らなかった」と語っていた。

また、体験前には「子どもが好き」「かわいい」といつていた生徒の中で、「子どものめんどろをみるのはいへんだと思った」と話す生徒も少なくない。これをマイナスの変化だととらえるよりも、漠然とした観念的なイメージから脱する一歩だと考えるべきであろう。この「知る」ことは、異年代の子どもの発達段階を個々の体験から感じることもある。

次に挙げたいのは「自分を知ること」である。触れ合い体験後に、生徒たちの感想に「自分の○○を思い出した」「なつかしかった」などの表現が見られる。人間は誰しも、突然、時間軸をさかのぼって、ある時期の自分の姿を思い出すことがある。時には、ある瞬間の自分の行動そのものが鮮明に浮かび上がることもあるかもしれ



ない。中・高校生という時期は、自分がどんな存在であるのかを模索する時期である。この模索においては、現在の自分のことだけに終始するのではなく、時間軸の中で自分をとらえ直すことが必要である。現在、何かを研究する時に、生涯発達の考えていく傾向が強くなっているが、まさに、自分がどこからきて、どこへいくのかを探る中で、自分がどんな存在かをとらえ直すことが重要なのである。

子どもとの「関係性」のなかで

新しい自分と出会わせる

「子どもを知る」そして、子どもを通して「自分を知る」ことは、生徒たちにとどのような変化をもたらすのだろうか？ 触れ合い体験前には、子どもや触れ合い体験に対して否定的であった生徒の中で、体験後に肯定的な変化を示す生徒も少くない。彼ら・彼女らにインタビューを試みたところ、自分たちが子どもたちに受け入

れられたという満足感を言葉に表していた。人間関係スキルの貧困さが問題視されているが、中学・高校での仲間関係に悩んでいたり、孤立している生徒たちも少なくない。そのような生徒が「子どもに喜んでもらえた」と表現するとき、そこには他者に受け入れられたこと、他者の役に立ったことの嬉しさがにじみでている。言いかえれば、子どもという異世代との人間関係における自信の萌芽であり、新しい自分との出会いということになる。

私はこれを子どもとの関係性における有能感として、社会的自己効力感という視点から研究を進めてきた。この子どもに対する社会的自己効力感が高まり、他者との関係性における意欲的な姿勢へと発展していくことによつて、右で述べた中・高校生における親性準備性としての「今、現在、他の人に対する受容性」と思いやりを備えた個人であるための資質」の育成につながるのだと考える。

また、教師からみると、授業や休み時間などの学校生活以外の場面で、新しい生徒の一側面に触れる機会でもある。すなわち、生徒が子どもとの関わりという過程において新しい自分に出会うと同時に、教師も生徒をとらえ直す機会をもつ可能性があるということである。このような機会を生み出すためには、教師は生徒たちの個々の多様な体験の意味をみとる力がなければならない。子どもたちが遊んでいる側にすわって、その様子をみてくただけの体験であっても、ひっそりと自分の小さいころのことを思い出したりしていることもある。教師がその体験を励ますことによつて、その体験はより有意義なものとして価値づけされるだろう。そのためには、幼児教育に関わる方々の理解と支援が必要不可欠である。子どもとの関係性のなかで、生徒が新しい自分に出会えるように、また教師が新しい生徒に出会えるように、幼児教育に関わる方々に、是非、力を貸していただきたいと切に願っている。

(千葉大学)

参考文献

本論で述べられている「親性」「親性準備性」及び「保育体験学習（ここでは子どもとの触れ合い体験としている）」については以下の文献に詳述されている。

伊藤葉子「中・高校生の親性準備性の発達と保育体験学習の教育的効果の検討」博士学位論文、お茶の水女子大学、二〇〇三年

引用文献

- 1) 深谷和子「親（おや）性」とペアレンティング・昭和六三年度～平成三年度家庭教育研究セミナー報告書…子どもの社会化と「ペアレンティング」国立婦人教育会館、一九九二年、六七～八五頁
- 2) 大日向雅美「母性の研究」川島書店、一九八八年、六〇～六一頁
- 3) 小嶋秀夫「養護性の発達とその意味」小嶋秀夫（編）「乳幼児の社会的世界」有斐閣、一九八九年、一八七～二〇四頁

観察者のノートに子どもが描くものは？

砂上 史子

観察のなかで出会うこと

私はこれまで幼稚園や保育園での観察を継続的に行ってきました。私の観察スタイルはあるひとつのクラスに継続的に入らせていただき、子どもたちの生活のなかに参加し、観察メモをとり、そのメモを記録としてまとめ、保育者の先生にフィードバックするとい

うものです。

現在ゼミナールの学生とともに継続的に観察させていただいている保育園では、先生方のご厚意もあり実際に子どもとかかわる形で参与させてもらっています。そのなかでこれまでの観察にはなかった出来事に遭遇し、そのなかで子どもについて新たに気づくことも多くあります。ひとつが、子どもたちが私の観察

ノートに絵を描くということです。

観察者に徹する姿勢で臨んでいるとしても、子どもたちにとって観察者という存在は決して透明人間や壁のようなものではありません。子どもたちが私のノートに描いてくれる絵はそんな当たり前のことに気づかせてくれると同時に、子どもたちが心のなかで大切にしている世界の一端を教えてくれるものでもありません。

「かいて」から「かきたい」へ

私が現在観察しているクラスは四歳児のクラスです。その前年度は三歳児クラス、前々年度は二歳児のクラスを観察させてもらっており、現在のクラスの子どもたちのなかには、その子が二歳児クラスだったときに観察していた子もいます。

二歳児クラスの観察しているときから、子どもたちは私のノートに興味津々でした。観察者としては当然

り前と思っけていても、子どもたちからすれば自分たちのそばでせつせと何か書いている大人の存在はやはり気になるものなのでしょう。子どもたちはよく「何かいてるの」「みせてー」と声をかけてきました。走り書きの文字や図ばかりのノートを見て不思議そうな表情を浮かべたり、「これ〇〇ちゃんの名前だよ」と教えると少し嬉しそうな表情をしたりしていました。

二歳児、三歳児クラスの観察のときには、「アンパンマンかいてー」などと観察者に何かを描いてほしいことがほとんどで、自分で描きたがることの少なかつた子どもたちですが、四歳児クラスになるとそれが大きく変化し、観察者のノートに自分自身で絵を描きたいというようになりました。「かいて」から「かきたい」という変化に、幼児期の子どもの「表現する主体」としての育ちを感じるとともに、そこで描かれる絵や文字に子どもたちの願いや思いが込められているようにも感じます。

子どもは観察者のノートに

何を描いているのか

では、子どもたちは観察者のノートに何を描いているのでしょうか。

私の観察ノートの子どもたちが絵などを描き始めたきっかけの一つは、Aちゃんのレストランごっこでした。AちゃんとBちゃんが私のノートをいたずらっぽく持つていつていろいろと落書きをしているうちに、Aちゃんが「ご注文は？」と言ってレストランごっこが始まりました。私が「じゃあ、プリンください」「サラダください」とお客さんとして応えようと、Aちゃんはウエイトレスが注文を伝票に書くふりしをしました。このとき「まだ、『お』と『よ』とくしか書けない」と言うAちゃんに対して、私が「うそこの字でいいよ」と言うと、Aちゃんが文字を書くふりを続けたことが印象的でした。そのときAちゃんがノート

に書いたものが図1です。「さ
らだ」「おむらいす」などA
ちゃんなりに一生懸命に書いた
様子がうかがえます。

正確な文字ではない字もあり
ますが、四歳から五歳にかけて
の時期の子どもにとつて文字を
書く（ふりをする）ことへの興
味や意欲が、ひしひしと感じら
れます。この観察の次の観察
（二週間後）でも、Aちゃんは
またレストランごっこをして、
観察者のノートに同じように注
文を一生懸命に書きました。

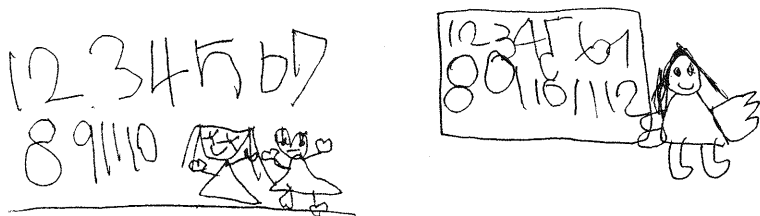
Aちゃんが観察者のノートに書いているのを見て刺
激されたのか、他の子たちも「かきたい、かきたい」

▲図1 4月24日 注文メモ（Aちゃん）

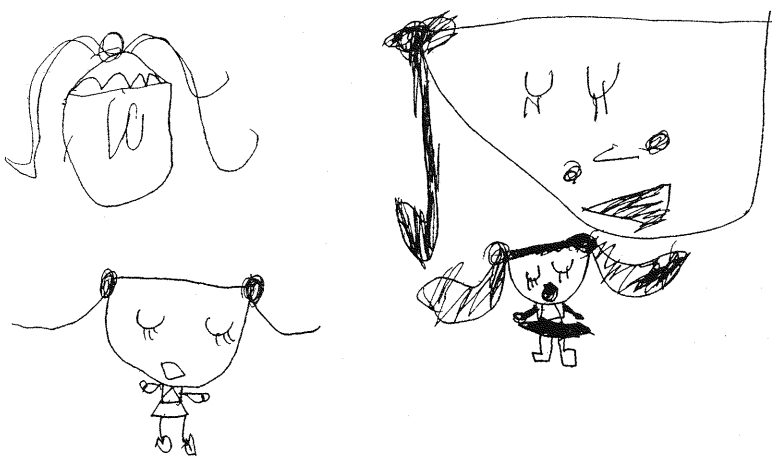
とやってくるようになりました。

最初は遠慮もあつてかノートの隅っこに小さく描いていたのですが、少しずつノートの一頁をまるまるつかつて絵を描くようになりました。「かきたい」とやってくるのは女の子が多く、メンバーもほぼ決まっているせいか、その子たちの描く絵と絵の関係や、その変化が面白く感じられるようになりました。

例えば、いつも絵を描く「常連さん」の女の子たちは、お互いによく似た絵を描くことがあります。ノートが小さいため同時に描いているのではなく一人ずつ順番に描き、何を描くかはそれぞれの



▲図2 5月29日 数字と女の子 (Cちゃん:左, Dちゃん:右)

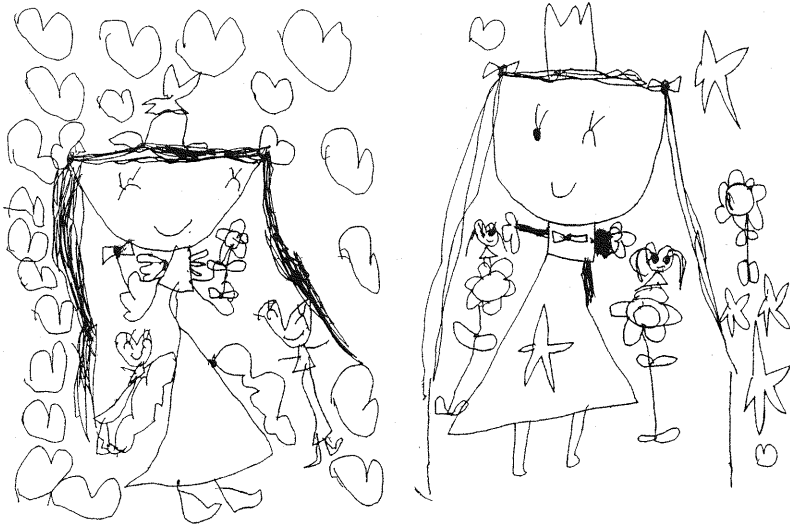


▲図3 8月21日 目を閉じている女の子 (Aちゃん:左, Eちゃん:右)

子が自由に決めていますが、同じ日に描かれた絵のなかに似ている絵を見つけたことは少なくありません（図2、3）。

このようにお互いの絵に影響され合う形で子どもたちは絵を描いています。自分の描きたいものを描く過程で、他者の絵をひとつの参照枠としたり、他者の工夫を自分の絵に取り入れたりしていると言えます。また、「常連さん」の女の子たちは、私の観察のなかでは一緒に遊んでいることが多く、おそらくそうした人間関係も影響しているでしょう。

そのようにして、他の子に影響されるなかで、特にCちゃん、Dちゃん、Fちゃんたちはいつもドレスを着た女の子のお姫様を描くことが多いのですが、その描き方に一つの流行のようなものが自然と生じてくるようになりました。お姫様の絵は、短い期間のなかでスカートの丈や髪型、王冠、周囲の星などディテールが工夫され変化していきました。例えば、お姫様の周



▲図4 9月4日 ハートと星に囲まれたお姫様（Cちゃん：左、Dちゃん：右）

围に星などが描き込まれたり、スカートの丈が長くなったり、髪型がまっすぐから外側に向かってはねたりするように変化したりしました(図4、5)。このことは、Cちゃんたちがお姫様の絵を描くことに並々ならぬ関心とエネルギーを注いでいること示しているとも言えます。

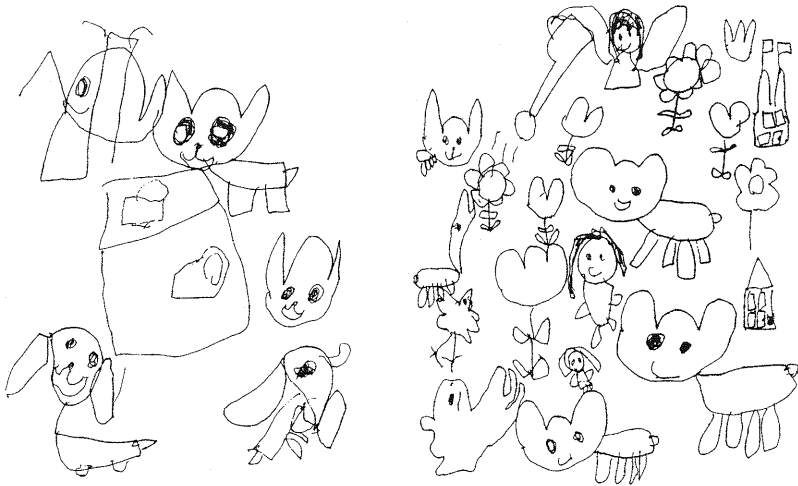
筆者自身の四、六歳の頃を思い出してみると、ほとんど毎日のように同じようにきれいに着飾った女の子やお姫様の絵を何枚も何枚も毎日毎日描いていました。風になびくフリルの動きや髪に結んだりポンを立体的に見せるために、さまざまな描き方を子どもなりに工夫していたように思います。あの集中力とエネルギーはいったい何だったのかと自分でも不思議になるくらいです。すべての子がそうだというわけではありませんが、繰り返し自発的に描かれるテーマが子どもにとって意味のあるものであるならば、幼児期に一部の子どもたちが描くお姫様の絵には、単なる絵のテ-



▲図5 10月2日 スカートの長いお姫様 (Cちゃん:左, Dちゃん:右)

マとしてだけでは無い願望のようなものが込められているように感じます。花や星やお月さまなどありとあらゆるきらきらしたはなやかなアイテムに囲まれて、にっこりと笑っているお姫様の姿はこの時期の子どもが夢見るひとつの「憧れ」や「幸せ」の姿なのかもしれません。

もちろん、すべての子が他の子に影響されたり、お姫様の絵を描いたりするわけではありません。「わが道を行く」タイプの子もいます。例えば、Gちゃんは、他の子たちがお姫様の絵を描いているなかでも、ほぼ一貫して主に犬のキャラクターをノートに描いています(図6)。一匹だけ描くのではなく、一ページに何匹も描くところがGちゃんの特徴です。十月十六日の絵ではキャラクターだけでなくお花や女の子なども描き、ひとつの世界がそこにはあるようです。絵もだんだんと細部まで描かれるようになり、Gちゃんの



▲図6 8月21日(左)10月16日(右)犬とおうち(Gちゃん)

こだわariを感じさせます。

Gちゃんの絵を周囲で見ている子どもたちから、「かわいい」と言われることもあり、Gちゃんは、ほぼ毎回こうしたキャラクターをノートに描きます。このように、自分の描きたいと思うものがはつきりと持続しているのは、幼児期後半のこの時期に「自分の世界」が形成されてきていることを感じさせるものでもあります。

描いているときのやりとり

私のノートに絵を描くとき。前述したように、ノートは小さくペンも一本しかないので（皆、私が使っている黒いペンで描きたがります）、一人ずつ順番に絵を描いていくこととなります。みんなそれぞれに思い入れのあるキャラクターなどを描くので、一人が描く時間はそれほど短いわけではありません。順番を待っている子にしてみればじれったい気持ちにもなりません。

す。絵を描きたいという子が四人も五人もいる場合には後ろの順番になった子はかなりの時間待つこととなります。そのため順番を待っている子が描いている子を急かしたり、不満をもらすこともあるのですが、それでも大きなトラブルになることなく誰かが順番を譲ったり、最後まで待っていたりする姿に、子どものひとつの育ちを感じます。

また、一人に一枚ずつ紙があつて、自分の筆記用具で描くことに比べると時間的にも物理的にも「不自由」と思われる観察者のノートに絵を描くことを子どもたちが好むのか、不思議な気持ちにもなります。そうした若干の不自由さがかえって、そこに絵を描きたいという気持ちをかきたてるのでしょうか。あるいは、観察者（大人）が使っているノートとペンを使って描くことに意味があるのでしょうか。

十二月の下旬の観察日は、「クリスマスとお正月を

迎える会」の日でした。その日は子どもたちが保護者の前でダンスや体操を発表することになっていました。保育室に入ると、そこにははなやかな衣装を着た子どもたちいました。「お花のプリンセス」を踊るという女の子たちは私のノートに絵を描く「常連さん」の子が多かったのですが、まさに私のノートに描いていたお姫様が抜け出てきたかのようでした。みんな私を見るとにっこり笑って自分が着ているドレスや髪飾りなどを嬉しそうに見せてくれました。

その日も発表の出番を待つ子どもたちは私のノートに何か描きたいと言いました。出番を待っていることもあり、「今日は（お絵かきは）お休みにしようか」と言うと、子どもたちは「描く」ふりだけと言って、私の膝の上でノートにペンを走らせるふりをして満足していました。それが一人だけでなく五人も六人も順番に並んで待っている姿を見て、「やっぱり不思議だなあ」「観察者のノートの何がそれほどまでに惹

きつけるのだろうか」と改めて感じました。

子どもたちの生活のなかで絵や文字を描く機会やそのための道具は珍しいものではありません。しかし、なぜこれほど子どもたちが「観察者のノート」に描きたいと思うのか、そしてこれからどんな絵や文字を描いてくれるのか、そんなことを考えつつ、楽しみにしつつまた子どもたちのある場所へ赴いていきたいと考えています。

（弘前大学）

※この原稿を執筆するにあたりまして、継続的に観察させていただいている財団法人鳴海研究所清明会みどり保育園の先生方、園児の皆様にご心からお礼申し上げます。

育てる者を育てる「保育者養成」の課題

——自我の成長という観点から——

塚田 幸子

はじめに

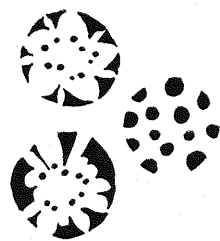
ある年度に発足した保育者養成課程において、前期を終えた五か月足らずの段階で振り返った考察がある。新しい養成課程の教員たちにとって、学生たちとの出会いは驚きと発見の連続であった。

入学式、オリエンテーション、授業開始

入学式で学生たちと初めて出会うことになった教師

たちが最も驚いたことは、保育者養成課程の学生たちが、他学科の学生たちと比べて、入学式やオリエンテーションで著しく私語が多いことだった。学生たちは何度も多数の教師から注意叱責を受けるが、一向に静かにならなかった。このことで授業が始まってから教師たちは悪戦苦闘することになる。その過程で教師たちが、指導法をめぐって話し合いを重ねていくのだが、教師全員で会議を開くこともあれば、二、三人でその都度気づいたことを互いに話し合ったり、相談し

たりということが、中学や高校の職員室でのようにして積み重ねられていった。養成校では教師が学生と触れあう時間が少ないため、一人ひとり



の学生について多面的な理解を得ることは困難があるが、筆者はチームとして教師たちと話しあう過程で自分自身の中に形成されていった学生観を自覚し、意識するようになっていった。

入学式直後から、学生たちの髪型（髪の色を含めて）、化粧、服装、まなざし、顔の表情、言葉遣い、姿勢や歩き方、態度は、全員ではないものの、保育者をめざす学生のものとは思えないほど過激で挑発（挑戦）的なものがあると教師たちは認識した。学生との出会いの印象は教師にとって決して良いといえるものではなかった。教師たちは筆者を含めて全員が自信と希望を失い、不安と絶望にとらわれそうになるのを辛うじて耐えていた。困難に遭遇しても何とかそれを持

ちこたえる力というのは大人の「大人性」と言える（注1）。また、津守真はこれを育てる者の「自我」の力（注2）と言っている。しかし、この「自我」という言葉は自分勝手という意味での「わがまま」という言葉と結びつきやすいために、全く逆の意味にとられることが一般の人々の中には多く見られるという弊害がある。今後の課題として新しい言葉が必要なのではないかと考え始めてはいるが、とりあえず、ここでは自我という言葉を使うことにする。

入学当初、学生たちが発していたメッセージは、明らかに教師たち、ひいては大人、社会全般に対する不信であったと言つてよいだろう。そこで教師を絶望が支配すれば、教育（「保育」と言い換えてもよい）の基盤が崩壊する。筆者は乳幼児（障碍をもつ子どもや、いわゆる問題行動をとる子どもを含めて）の保育を実践研究してきた過去の経験に立ち戻り、また、自分の子どもたち（現在はすでに成人して職業に就いている）を育てた経験に立ち戻り、外見に現れた姿、形

ではなく、学生たちの中に子どもを見出す必要を認識していった。十八歳の学生は身体の形や大きさから言えば大人そのものだから、つい、大人として厳しい基準を要求することになることも避けられない。厳しい指導をしなければならぬという意見を主張する一部の教師たちの声は筆者自身の内なる声と重なっていた。というより、自分自身の迷いや不安でもあった。

つぶやくように愚痴をこぼす声も同じで、自分の声の外に現れて対話をしている、つまり、思考していると、いつでも過言ではなかったのだ。そういう意味で、教師陣は一人の人格のように機能していたのだと考えることができる。そして、このことも筆者は自我の働きと捉える。

学生の中に「子ども」を見出すということは、学生を子ども扱いすることとは違う。どんなに幼い子どもでも、子ども扱いされることを望んだり喜んだりはしないものだ。では、どうするのかというと、ひとつは学生たちを我が子と同じように見る、あるいは自分自

身の学生時代に重ねあわせてみるという方法がある。筆者の場合、比較的容易にこの方法を用いることができた。自分自身が学生だった頃、保育を学んでいた筆者は、まだ十八歳でしかないのに、教師から同じ成熟した大人としての様々な振る舞いや見方を保育者として要求されることが重荷に感じられてとまどったことも忘れずにいる。自分の中にある未熟な子どもっぽいものを認めて少し猶予を与えてほしいと内心思っていたという記憶だ。

また、つい数年前まで学生だった自分の娘たちに話を聞いてもらったところ、昔は結構突っ張っていた娘が自分自身の当時の気持ちをさらりと言葉で解説することができるようになっていて、学生の気持ちを代弁する結果となつて筆者を驚かせた。学生の見方や感じ方に寄り添うような教師側の見方が成立する上で大いに助けられたのだった。

こうして、筆者の学生観が形成され変容していくのと同時に他の教師たちそれぞれが、やはり似たような

経過をたどって、それぞれの学生観を作り上げていったことは非公式なお互いの報告や話しあいでも確認されていった。学生に対する肯定的な見方が強められたり、逆に危機に瀕したりすることが以下の行事を契機として生じていった。

体育祭

学生たちにとっても教師たちにとっても、体育祭は保育者養成課程の一員であるという共同の意識を高め、一人ひとりが個人として互いに能力や持ち味を認め、認められるという絶好の機会となった。文字通り、身体行為を通して、学生も教師もあちこちで様々なかかわりを持つ機会を得ることとなったのだ。学生たちは実に応援しがいのある真剣さで積極的に各種競技に参加していた。応援する教師も笑顔で大きな声と身振りで一人ひとりに期待し肯定しているメッセージを熱心に送り続けた。これは「保育」という人を育てる行為、営みそのものを教師たちが学生に対して実践

してみせたものだと思えることができる。少なくとも筆者自身はそのことを自覚しながら行っていた。そして、大半の教師が自覚的に行っていたと言えるだろう。

乳幼児の保育では、例えば一歳児たちが、誰か一人が走り始めるや、その後にはほぼ全員がついて走り回り、渦のようになって喜びがわき上がるという現象があり、報告もされている。子どもたちは一番を競うものでなく、勝ち負けを競うのでもなく、自分の身体が自分の思い通りに動かせるという「能動性」(注3)の喜びを、そういう全く個人的な喜びを共同のものにして、更に大きな喜びを味わっているのだと言えることができる。ここには古代から人間の共同体に普遍的に見られる「祭り」の根源的な姿を見ることができよう。日本の運動会(体育祭)は諸外国では見られない独特なもので、子どもだけの父母だけではなく地域の人々も参加するなど、地域共同体の祭りとして受け継がれてきている。

体育祭で張り切つて、思い切り身体を動かした学生の中に、教師たちは右記の一歳児のような「子ども」を見出すことができたのだつた。教師たちがそれぞれに発見した学生の中の「子ども」、言い換えれば、輝く美しい「生命性」(注4)を互いに報告、確認し、共有していくことは容易になし得ることだつた。ここでは大きな努力もなしに、意識的に話しあう努力もなしに、自然にわき上がる喜びとして、互いに学生の良さを語りあうことができたのだつた。それでも、これはまだ始まりのうちに過ぎなかつた。

夏のキャンプ

学生たちは体育祭で力を出し、自分たちの存在が認められ確かなものになる体験、つまり、「自我」が強められる体験を通して安心して教師を信頼し、相談に訪れるような変化が見られるようになってきた。講義や実習、行事についての疑問や不安を、また、できつあつた友人関係の悩みなどを打ち明けるようになって

ていった。体育祭とは違って泊まりがけのキャンプでは、誰もが何らかの不安や悩みを抱えて当然といえは当然のことだつた。また、他の養成校との比較でカリキュラム構成についても率直な意見をぶつけてきている。果たして自分たちに保育者としての実力が身につくのだろうかという不安だつた。

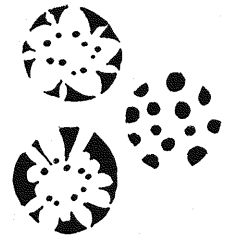
教師たちは真剣に誠実に学生の相談に答えていく努力を続けた。講義や実習などの授業を通して知識や理念、技術についてはもちろん、それぞれの専門で精一杯伝えていく努力を続けた。

教師たちの励ましもあつて、キャンプには全員が参加し、一、二名病人が出たりはしたものの担任教師の献身的看病もあり、学生たちは大きな関門も通過していった。

前期末試験

七月初旬のキャンプが終わつてから七月末の試験で前期が実質的に終了するまでの短い期間は、学生に

とつても教師にとつても最も長く感じられるような辛い時期だった。教師側から見ると、初めて学生を受け入れることになった保育者養成過程



の教師たちの方が互いに不安と緊張を口に出すほどだった。

試験というものは、課される学生が習得した知識や能力を試されるという側面と、教師が自らの指導力の成果を問われる側面を併せ持つ両義的なものであることは、教育者を自認する者にとつて当たり前の重い事実だ。その重責から逃れたい衝動を教師たちは抱えていた。

試験を実施してみると、試験に取り組む学生たちの真剣な面持ちと気迫に筆者は驚きを禁じ得なかった。その姿勢は当然成績にも反映してくるものだ。学生の成績は予想以上によいもので筆者は再度驚かされたのだ。後は、試験に取り組む真剣な姿勢が少しでも通常

の講義や演習においても發揮されて、継続的な態度として実っていくことを期待し、励ましていくことが課題となってくる。

まとめとして

前期を通じて学生たちの出席率は驚異的な高さだった。全員出席という日が何日も何日も続いた。教師たちも一様にその事実を驚きと喜びをもつて語りあった。キャンプを境に怪我や病気など体調を崩す学生もちらほら現れ始めたものの、出席状況は試験に至っては一〇〇パーセントという素晴らしさだった。これほど真面目に出席しているという事実が語っているもの、それは、学生たちの「保育者になりたい」という熱い思いに他ならないと筆者は考えた。いや、むしろ、他の教師たちとの語りあいの中で気づかされ、考えが共有されて、共通の認識となっていくものだと言った方が適切だろう。こうして、学生の発しているメッセージを教師が読みとる努力をし、気づいたこと

を互いの対話を通じて確認しあうことで、教師たちの「自我」が育ち、育てられ、強めあっていたことが分かる。「自我」は便宜的な名称で実態があるわけではない。人と人とが織りなすかわりあいという機能こそが「自我」なのだ。

ここで、平成十五年度全国保育士養成セミナー分科会で東京教育専門学校の杉本太平が発表したときの言葉を引用するが、それは、筆者が繰り返し他の教師たちと互いの考えや感じ取ったことを話しあい、また、自分自身との内的対話を通じて確かなものにしていった考えと共通のものがあつたからだ。その言葉は「学生は入学時からすでによい保育者になろうとしている存在である」というものだ。こうして言葉にしてみると「なんだ、当たり前ではないか」と思う人と、「どう見ても保育者をめざしているようには見えない学生もいるのではないか」と思う人に反応は分かれるだろう。というより、筆者を含めて教師たち全員が、この二つの考えの間に振り子の針のように揺れ動き続けた

前期だったと言った方がよいだろう。学生を早く保育者にふさわしい姿に変えたいと強く願うあまり、目の前の学生のありのままが見えなくなってしまうようになる危機が何度もあつたことは事実だからだ。

E・H・エリクソンは乳児期に獲得する大切なものとして「基本的信頼」(注5)をあげている。保育者(母親を含めて)は子どもの中に人間というものに対する基本的信頼を育てることを目標にして努力を続ける。乳幼児の保育では実践できていたことが、学生に對してもできなければ、これまでに獲得してきたものが崩壊してしまうという危機感を筆者は感じていた。入学当初、学生たちは前述したように、あらゆる角度から、大人というものへの不信を表明していた。学生から信頼される教師になるためには、まず、教師自身が自分の考え方や見方を変えなければならぬと考えたのだ。全面的で無条件の信頼を自分から示すことができなければ、学生たちが発しているメッセージ、大人(親や教師)への不信を解くことはできないのでは

ないかと考え、基本的信頼の相互性を認識したのだ。

自我、つまり、「私が他ならぬ私である」という意識は、近年の脳神経科学の研究成果を待つまでもなく、論理的に他者との関係の上にか成立し得ないもので、他者（保育者、教師）とのかかわりを通して育まれる、生き生きとダイナミックな過程であるということが出来る。相手に変わってほしいと思うのなら、自分の見方を変えることで相手が変わって見えてくるはずだ。筆者は何度も子どもとの間でそういう見え方の変化を体験している。

子どもを育てること（保育）は、子どもを産めば当然、たとえ子どもを産んだことがなくても誰にでもできること、本能のようなものだといふ過小評価や偏見が、現代においても、いや、現代だからこそ、はびこっている。本来、子どもを産み育てる営みは、ただ一人だけで行うものでもなく、家庭内だけで、閉じられた空間だけでなし得るものでもないということとは、長い人類の歴史を振り返ってみるまでもなく、実は容

易に気づくことだ。子どもは何人も大人や子どものいる共同体の中でこそ、健やかに育つように生まれてくるのだということ強調しておきたいと思う。そして、その共同体の成員同士は、時には利害が衝突したり、考え方が割れることがあっても、お互いがお互いを大切に思い信頼しあうことから、平和的な手段で調整する知恵を出しあって危機を乗り越えていく、辛抱強さ、誠実な生き方を、身をもって示すことで子どもを育てていくのでなければならぬ。

この時点でも確実な成果として、学生たちの目には柔らかで優しい光が宿り、表情には自信に裏付けられ落ち着いた美しさや素直なかわいらしさが日増しに現れてきていることを教師たちは喜び、互いに確認しあうことができた。ゆとりをもって目を合わせ、元気ではつらとした挨拶を学生の方からしてくるのは言うまでもない。若さゆえにもっている学生本来の生命的な美しさを、毎日の学生にも新たに発見できることほど教師たちにとって嬉しいことはない。

学生の自我形成と成長を助けることは教師の役目なのだが、本稿では教師の中に育つ自我に焦点を当てて考察を試みた。本来的には学生の中に、あるいは教師の中に、というより、学生と教師双方の関係のありようそのものが自我と言うべきなのだが、理解を容易にするために一方に比重を置いた考察とした。

右記は、学生たちとの出会いから約半年が経過したに過ぎない時点での考察に多少の修正を加えたものだが、その後もこれを覆すような事態には至っていない。渦中にあるからこそできた考察でもあることを付記しておこう。
(昭和学院短期大学)

注

1 大人性 浜口順子 日本保育学会第五十三回大会研究発表論文集三一五 『保育における「大人性」と「権威」につ

SM11000

2 自我 津守真著 『自我の芽生え』 岩波書店 一九八四

四頁「次第に明瞭に意識されてきた外界と内界とを組織づける最初の体験の時期……すなわち、一人の人間としての自我の力がつくられる時期」

同書 八頁「自分の世界の意識の側面である自我」

同書 九頁「自らの初体験を位置づけ、組織し、統合する自

我」

E・H・エリクソン著 仁科弥生訳『幼児期と社会Ⅰ』み

すず書房 一九七七 三頁 初版の前書き「自我とは人間の

経験や活動を環境に適應する行動に統合する能力を意味する

概念である」

3 能動性 津守真著 『保育者の地平』 ミネルヴァ書房

一九九七

4 生命性 津守真著 『保育者の地平』 ミネルヴァ書房

一九九七

5 基本的信頼 E・H・エリクソン著 仁科弥生訳『幼児

期と社会Ⅰ』みすず書房 一九七七

たけのご幼稚園とラジオのおっちゃん(2)

庄籠 しやうろうもり 道子

「おっちゃんが走るで」の巻

たけのご幼稚園には、朝とか二十分休みに、よくたけのご小学校の小学生がやってくる。なんせ園庭と校庭はつながっているから、すぐ来られる。一年生になったばかりの子どもたちが、入れかわり立ちかわりのぞきにくる。

「なつかしいわあ」

「ほんま、なつかしいわ」

なんて言っている。ついこの前卒業したばかりなのに。

四年生くらいの男の子が来た。籠（こもり）先生に何か言ってる。りようた・たつや・としなりの三人組は、こっそりそばに行つて聞き耳をたてた。四年生が言ってる。

「なみかたってごっついブスやろ」

「あら、かわいいわよ」と、籠先生。

「いや、ブスやで」

「そんなことない。かわいいよ」

「いや、ブス。めっちゃめっちゃのブス。絶対ブス」

なみかちゃんってブスやと思う？ 三人組は、顔を見合わせた。ブスやとは思わへんけど、あそこま
で言われたなら、ほくだったら「そういえば、
ちよつと……」と言うな。籠先生も言うかな。

「絶対ブスやない！ かわいい!!」

籠先生、むきになって言い張っている。籠先生、
がんこもんやなー。

四年生が帰っていった。竹田園長先生が来た。

「あら、あれ、なみかちゃんのおにいちゃんや。何
か用があつたんかいな？」

籠先生が、ちよつとドキツとしたようなホツとし
たような複雑な顔をした。籠先生、がんこもんで良

かつたなあ。

「先生、バットとボール、貸して」

一年生が来た。野球だ。ほくたちも寄せてもらお。

三人組は、一年生の後について行つた。

野球をしていると、

「おっさん」もみの声が出た。

「えっ？」籠先生があわてて振り返つた。

前の道をラジオのおっちゃん歩いてくる。ほく
らは、保育所の時からのつきあいやから、ラジオの
おっちゃんのこと、よく知つとるけど、四月に来た
ばかりの籠先生は、初めておっちゃんを見るらし
い。しげしげと見ている。

年のころは六十歳くらい。やせていて頭は丸坊
主。日に焼けた黒い顔。毛玉のついた足袋のくつし
たにぞうり。つぎのあたった作業ズボンに、下着の
シャツ。左耳にラジオを当て、ラジオ体操の曲に合

わけてリズムカルに右手を振りながら歩いてくる。

おっちゃんは、向かいの保育所の門のかんぬきを開けて入っていく。

おっちゃんが保育所から出てきた。門のかんぬきをきちんと閉める。幼稚園に入ってきた。りょうたが、

「おっちゃん、おはよう」と言った。

「おっさん」

もみが、おっちゃんに寄っていった。籠先生も寄っていった。

おっちゃんは、もみにも籠先生にも気付かないみたい。ラジオ体操の曲にあわせて右手を振りながら、小学校の校庭に歩いていった。

籠先生は、おっちゃんが持っているラジオをじーっと見ていた。そして、むずかしい顔をして竹田園長先生の所へ歩いていった。

「園長先生、園長先生が、ラジオのおっちゃんは、いつもラジオ体操を聞いていると言うてはったか

ら、私、カセットデッキじゃないのかと思つとつた

んですけど、あれは、やっぱりラジオですね。……一日中ラジオ体操を流している局なんかないやろう

に、なんで『ラジオのおっちゃん』のラジオからは、いつつもラジオ体操が聞こえてるんやろ。なんやろ？ うーん」籠先生は、うなづけている。

たつやが、としなりに、こっそり言った。

「籠先生、あほちゃうか。ラジオを持つとおから『ラジオのおっちゃん』やんか。カセット持つとんなら『カセットのおっちゃん』って呼ばれとるわ」

「ほんまや」りょうたが言つて、三人組は、こっそり笑つた。

次の日。

「リレー、したい」

りょうたが言つた。竹田園長先生が園庭に白線でトラックを書いた。籠先生がバトンを出してきた。

オレンジチームと白チームに分かれた。白チームは

帽子を裏返す。

「はずがオレンジチームになった。「ほくも」「ほくも」とオレンジチームばかりになった。」

「あら、これじゃあ、リレーはでけへんなあ……」

籠先生がいじわるそうに言った。えらいこつちゃ。

「ほく、白になるわ」としなりが言った。「ほくも」何人かが白チームになった。白チームがひとり足りない。

「よっしゃ。園長先生が入ったる」

「やった！」

走る順番を決めていると、保育所の建物の向こうから、大きな叫び声が出た。ラジオのおっちゃんの声や。ほくらはよー知つとおけど、四月に来たばかりの籠先生はぎよつとした顔になった。そして、あわててまわりを見まわしている。

「ラジオのおっちゃんの声やで」たつやが教えてやった。

「ああ、そうなん」と籠先生が安心したように答えた。

ほくらは当たり前前の顔で並んでいる。園長先生も驚きもせず子どもたちの列に並んでる。

しばらくすると、保育所からラジオのおっちゃんが出てきた。「ほんまや」と籠先生。

おっちゃんは、幼稚園に入ってくると、園庭のトランポリンのすみにラジオを置いた。トランポリンには、ももぎとじゅんときみなりが跳んで遊んでいた。ラジオを置いたおっちゃんは、「どけ」というふうに手を振って、大きな声を出した。三人はあわてて、トランポリンから降りた。

「おっちゃん、おはよう」

りょうたがあいさつした。

「おつ、おはようー」

おっちゃんがつこりした。

「おっちゃん、おはよう。あついなー」

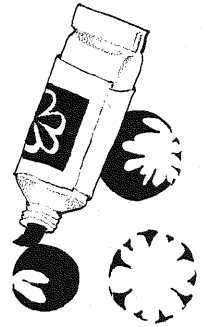
園長先生もあ

いさつしてゐる。

「あちいなー」

おっちゃん

片手をあげた。



「きょうは、涼しいけど……」籠先生がつぶやいた。おっちゃんは昼でも夜でも「おはよう」と言い、どんなに寒い日でも「あちいなー」と言うんですよ。そんなことも知らんのかいな。たつやが教えてやったら、「そうか。寒いなーより暑いなーの方がインパクトがあるもんなー」などと、わけのわからんことをぶつぶつ言った。

「よいい・どん！」リレーが始まった。さすが、みんなが同じチームになったがっただけあって、かずはめちやくちや速い。

竹田園長先生も負けてない。細い身体で必死に走っている。

「いけーっ」

「追いぬけー」

みんな大声で応援している。さあ、アンカーだ。これで勝敗が決まるのだ。

その時だった。何やら大きな叫び声が出た。

見ると、ラジオのおっちゃんがジャングルジムの横に立っている。こっちに向かって「よいい・どん」の構えをして立っている。

「おっちゃんが走るで」

りょうたが言った。

「どかな」

たつやが言った。子どもたちがさっと園庭のすみや、園庭の真ん中に行った。

「としちゃん、おっちゃんが走るで」

りょうたの声にアンカーで走っていたとしなりも、さつとはしつこによけた。籠先生も、よくわからないままに園庭のすみっこに行った。

ラジオのおっちゃんが走り出した。さつきまで子

どもたちが走っていた園庭のトラックを走る。速い。全速力だ。

おっちゃんのうしろについてりようたが走り始めた。かずも走り始めた。たつやもとしなりももみもついて走った。おっちゃんは速い。追いつけない。

だけど、おっちゃんは、トラックを二周すると、走るのをやめた。はあはあ言ってる。足元がよたよたしてる。

「あー、あかん、あかん。」

そう言いながら、おっちゃんは、トランポリンの方に歩いていった。

おっちゃんにトランポリンから追い払われてぶらんこに乗っていたももきたちが、すつとトランポリンのそばに戻ってきた。

おっちゃんがラジオを手に取ったとたん、ももきたちが、さつとトランポリンに乗って跳び始めた。

おっちゃんは、ラジオを左手に持って、小学校の校庭に歩いていった。

「きょうは、ラジオから音が聞こえてなかった」

おっちゃんの後ろ姿を見送りながら、籠先生は腕組をして考えこんでいる。

ぼくらはそれどころじゃない。勝負の決着をつけねば。

「今度はぼく、白組になる」

「アンカーやりたい」

と、並び始めている。

「あー、さつきの勝負は？」籠先生がみんなの顔を見たけど、誰もそんな過去の事にはこだわっていない。

「あかん。あんたはさつきもアンカーやったろ。ほかの子にかわり！」

竹田園長先生がとしなりとアンカーたすきを取り合いしてる。

(保育研究グループ はるにれ)

十八世紀ドイツの子どもの本(3)

エアフルト版

『子どものメルヘン集』

佐藤 茂樹

メルヘンは子どものためならず

まず、この本のタイトルから見ていきましょう。

「子どものメルヘン集」という訳は、ずいぶんこなれない訳と感ぜられるかも知れません。事実、意味だけ汲めば「童話集」と訳した方が日本語としてはしっくりきます。それでは、なぜ直訳のまま紹介す

るかということになりますが、その理由は、このふたつの言葉の組み合わせにこそメルヘンの出版とそれをめぐる時代の緊張が如実に見て取れるからに他なりません。

この本の序文も、メルヘンを書いていたという著者の分身に対して、友人（世論の代言者の役回り）の「あなたが、ですか。メルヘンを、ですって、何

と奇妙な」という台詞で始まります。結論から言えば、「子ども」と「メルヘン」という組み合わせは、

十八世紀には自明のものではなかったということなのです。へメルヘン」という言葉は、この時代には、愚にもつかない作り話の総称にすぎません。少なくとも、子どもの教育を考えて書物を買いつくえようという当時の親たちにとっては、メルヘンこそ子どもの中から根絶してしまわなければならなかった最大の脅威だったと言ったら、意外の感を抱かれるでしょうか。一世を風靡したある児童誌には、登場人物の父が自分の子どもたちを読者に紹介する場面から、「わたしは、けっして子どもたちの世話をおろかで頭にメルヘンのいっぱい詰まった子守り女たちにまかせたことはなかった」という台詞が出てきます。ずいぶん言い草ですが、理性にもとづく合理的な世界観を至上とする啓蒙思想にとって、メルヘンは今なお迷信に満ちた旧世界を引きずる非合理的な考えの温床に他ならず、それを根絶することは市

民階級にとっていわば階級的な急務でもあったのです。

メルヘンが長い年月を通して培われた掛け替えのない民俗的な財産であるという評価が一般化するのには、次の世紀の半ば以降の話になります。メルヘンの代名詞とも言えるグリム兄弟の童話集、すなわち『子どもと家庭のメルヘン集』が世に出るのは、一八一二年のことです。出版の当初、特に教育に携わる人々からの無理解やさまざまな批判にさらされ、受け入れの土壌が整うまでにはさらに歳月を経なければなりません。今回ここで取上げる『子どもとメルヘン集』は、啓蒙思想の最盛期にそれが退けようとしたものの中にこそ子どもの成育にとって大切な鍵を見出そうとした試みです。したがって、当時の児童書の王道から見ると、まさに異端であり、先例のない非常に大胆な試みであったと言えます。このことは、どんなに強調しても強調しすぎることはないでしょう。そのような位置づけを明確に

するためにも、ここでは、葛藤をはらんだふたつの言葉の組み合わせからなる「子どもメルヘン集」というタイトルを直訳のまま残しておきたいと思うのです。

口伝えの伝承の魅力

さて、前置きがだいぶ長くなりましたが、このメルヘン集は、一七八七年、匿名の著者の手によって出版されました。著者（一七五五—一八二六）は、ギユンターという姓（ファースト・ネームとミドル・ネームの表記には、クリステイアン・ヴィルヘルムやヴィルヘルム・クリストフ等の諸説があります）の聖職者で、晩年の二十五年間はワイマール大公領の孤児院の院長も務め、長く青少年の育成に携わりました。生涯の活動の中で、メルヘン集の編纂は一回限りの例外をなしています。

出版地の名を冠して「エアフルト版」と呼ばれることの多いこの書は、正確なタイトルを『口伝えの

物語から編まれた子どものメルヘン集』と言います。「金の卵を産む小鳥」「白い鳩」「忠実な狐」「王妃ヴィロヴィツテとふたりの娘たち」の四篇のメルヘンと「友人との対話」（メルヘンをめぐる当時の事情を証言する貴重な序文）を含むさまざまな書物でした。四篇のうち、先の三篇は紛れもなく口伝えの民衆的素材にもとづいており、最後の一篇だけさまざまなモチーフを自由に組み合わせた創作と見なすことができます。後に述べる理由から、これらのメルヘンはグリム兄弟のメルヘン集の陰に隠れるような形で忘れ去られていくのですが、「忠実な狐」はその後いくつかのアンソロジーに収録され、ドイツの読者は今日でも読むことができます。おおよそ、こんな話です——

長患いの王様がある晩、フェニックス鳥の歌声を聞くことが病氣から癒される唯一の手立てだ、という夢を見ます。王様には、三人の息子がいました。賢いと評される上のふたりと単純な性格と目さ

れている末の息子です。その鳥を求めて三人の息子たちが順に旅に出るのですが、上のふたりは病人の伏せる陰気な家をこれ幸いと出て行き、行き着く所は悪徳の末路です。真摯に父の回復を願う末の弟だけが、持ち前の優しさで途中に出会う狐の援助を受け、フェニックス鳥の探索を続けることができます。それでも狐の助言を再三にわたって守ることはできず、その都度窮地に陥る破目になります。鳥を手に入れるはずが、その前に魔法の馬を手に入れなければならず、さらにはそのために絶世の美しい姫を救わなければならず……という具合に難題は増えていき、身の危険は増すばかりです。忠告と違反、生命の鳥、動物の援助、魔法で動物に変えられた王子、度重なる窮地、怪物の手に囚われた美しい姫の解放……こうした魔法メルヘンに特有の様々な魅力的モチーフとその自然な展開が、最初から教訓の入れ物を意図して作られたこの時代の多くの物語に対して異彩を放っています。ここに、長い年月に渡っ



て培われてきた素材がそれを市民家庭の〈子ども部屋〉に橋渡ししてくれる人物と出会い、幸運に実を結んだ姿を認めることができましょう。

〈母〉への眼差し

では、この著者を他ならぬメルヘンに導いたものは何だったのでしょうか。著者は、それを「子どものためのメルヘンが不足しているというよき母親たちの嘆きに促された」と説明しています。このさり気ない母親への言及こそ、この時代に児童書に携わった大半の著者に比べて、この著者の位置を特徴的なものとしているひとつです。〈小家族制〉と呼ばれる家族構造の変化に伴って家庭内で新しい役割を担い始めたにもかかわらず、この時代には〈母〉が語られることはまれでした。前回紹介した『ロビンソン・ジュニア』にしても、母親の役割は、食事の準備ができたと呼びに来る程度にすぎず、一貫して〈父〉の導きが中心をなしています。また、『父

から子への助言』と題した本は多々あっても、『母からの……』を見つけ出すのは困難です。

職住一体の大家族制の時代と比べて、市民社会に成立した〈小家族制〉は職住の分離に最大の特徴があります。〈小家族制〉とは、両親と子どもを基本



単位とし、血縁のない同居者を含まない家族構成で
す。この家族構成の変化によって、かつて血縁以外
のさまざまな立場の人々を含んだ小社会であった家
庭は、完全に私的な領域へと姿と意味を変えます。

大家族制はいわば生産共同体であり、その中で各自
が担う役割は、均等な質の労働の主として身体的な
能力に応じた量的な配分であったと言えます。それ
に対して、この新しい家族制度の下では、質的な違
いが生じます。家計を支えるのもっぱら父親の役
割になり、その父親は家庭の〈外〉にある職場に出
勤するのが通常となります。母親は、就労から解放
されて、もっぱら家庭を快適な生活の場に整えるこ
とに一日の大半を費やすようになります。子ども
も、もはや身体的に未熟な労働力ではありません。
〈幼年期〉という固有な時期を割り振られた、将来
の階級の担い手です。この家庭内の新たな分業に
よって、家庭内で時間の大半を共有する母親と子ど
もは、お互いにこれまでと異なる関係を模索する間

柄になります。そして母親は、これまでの身体的な
意味での育児にとどまらず、精神的にも情緒的にも
はるかに大きな領域を子どもと分け持つことになっ
たはずなのです。それなのに、変化の一方の当事者
である母親は、まだ児童書の中に発言の場を持ちま
せん。これまでも触れた通り、理性とそれにもと
づく形成を代表する〈父〉の役割にしか照明は当て
られていないのです。

こうした時代を背景にしながら、著者は、「子ど
ものメルヘンが不足しているというよき母親たちの
嘆きに促されて、それらを書き留める気持ちになり
ました。そして、彼女たちの賛同に勇気付けられ
て、印刷させる」ことにしました。ここには、〈父〉
一辺倒の児童書の表通りの言説の陰で、母親も同様
に子どもの教育の一翼を担おうとしていた現実が証
言されています。しかも、自分たちの求めるものが
欠けているというのですから、表通りの言説が母と
子の実情をかならずしも満たしたものでなかったと

いうことになります。そして、著者が母と子の関係の絆として求め、母親たちの「賛同」を得た素材は、父親の理性が退けたものだったので。

高次の存在の導きの手

繰り返しになりますが、十八世紀の児童書のバツクボーンである啓蒙思想は、メルヘンを無知に由来する荒唐無稽な作り話と捉えていました。幼いうちからメルヘンに染まると、ありもしないものを恐れるようになり、現実を直視して原因と結果を究める意思と能力を育成できない、というわけです。その反対に、理想とされるのは「構造は透明で、素材の配列は首尾一貫し、明白な思考の展開と簡潔だが適確な言葉づかいを持つ書物」です。こうした書物を通して、子どもは現実の出来事のへ論理的連関を学ぶことができると考えられたのです。

これに対して、『子どものメルヘン集』の著者は、メルヘンも「真実への愛」に由来するものであるこ

とに変わりないと述べて、メルヘンを擁護します。

メルヘンとは、「高次の存在の見えざる手によって織り成され、導かれる不可思議な出来事の物語」の謂です。荒唐無稽に見えるとしたら、それは理性による分析的・合理的な理解の仕方とはへ異なつた。仕方て生を把握する試みゆえ、に他なりません。だからこそ、メルヘンは「(大人の男性に比べて)原因と結果の因果関係に囚われることの少ない子どもにこそふさわしい」という結論がここから導き出されていきます。ここには、メルヘンの価値を一元的に現実との合理的対応関係に従属させる見方から解放する斬新的なメルヘン観を認めることができま

す。理性の法廷で一方的な蔑みに晒されるばかりであったメルヘンは、ここに初めてふさわし弁護者を見出したと言えるでしょう。

著者は、執筆中に「こころ全体であらゆるものにあのように親密に係わりを持ち、魔法にかけられた王子が無事救い出されるのをあのようにこころから

喜ぶことができたあの幸福な時代への追憶」が蘇ってきたと記しています。メルヘンを楽しむということは、けっして物語そのものをそっちのけにして、絵解きに終始したり、教訓だけ引き出してそれよしとしたりするものではありません。読者は、物語という形を通してしか伝わらないものを体験するのです。そして、それを受けとめるのは、理性といった局所的な能力ではなく「こころ全体」なのだと思えた点、そしてメルヘンは自身の内にそのような「こころ全体」で物事に係わりを持たた幼年時代を宿していると考えた点に、この著書を次の世紀につながるものを見出すこともできるでしょう。

グリム兄弟の陰に隠れて

グリム兄弟は、自分たちのメルヘン集を世に送るに際して、序文の欄外注でこのエアフルト版のメルヘン集を評して「貧弱」のただ一言で片付けます。この「貧弱」が収録された本数のことか内容に立ち



入っての評価がいまひとつ定かではありませんが、グリム兄弟のメルヘン集が時代につれて評価を高め、ドイツのメルヘン集を一手に代表するほどに神格化されていくだけに、この一言の後世に果たした役割は小さいものではないでしょう。

このメルヘン集に限らず、時代を画する業績の陰で、先駆的な試みのいくつかが忘れ去られていくのは、世の常なのでしょう。特に先駆的な試みの特徴付けている要素こそが、評価基準の一元化した後では、マイナスの評価の要因となるものです。『子ども』のメルヘン集』では、各モチーフの展開に充分な余地を与え、発端から結末まで必要な話の分量を無理なく確保するために、一話を何夜かに分けて語り聞かせる工夫が施されました。例えば、先に紹介した「忠実な狐」（九四―一五〇頁）では、四夜に分割されています。語り聞かせる「母親にとつては負担が多くなり過ぎず、子どもたちは翌晩の続きをそれだけ熱心に待ち望む」ようにという配慮でもあり

ました。後世の評価には、まさにこの工夫と配慮が災いします。記憶から語り聞かせるのにふさわしい分量を自然に形成してきた民衆の知恵に対する無知の表れに他ならない、というわけです。また、目に見えない力への畏怖を形象化した妖精の導入も、フランス趣味の模倣としか見なされなくなります。妖精は、登場人物に試練を課し、見守りながら、最終的な調和へと導いていくのですが、この妖精の果たす教育的機能をメルヘンというメディアそのものの教育的機能と重ね合わせた着想は顧慮されず、自然な結末を損ねる機械仕掛けの解決手段に走ったことになってしまいます。こうして、ひとつの絶対的な評価軸が確立してしまった結果、いわば、ないものねだりをされ、本領とはずれた箇所への批判を招いていくのです。これは、このメルヘン集を時代の枠組みの中で公平に位置づけ、著者にふさわしい評価を願うものにとつて、たいへん残念なことと言わざるを得ません。

（関東学院大学）



障害をもつ幼児の保育(32)

—この子と出会ったとき—

津守 真 (M)

津守 房江 (F)

この子と生きるついで大切にしてきたこと(4)

M 愛育学園では、小学部の六年を卒業した後も、親子で度々学校を訪れてくれるので長い年月の人間の成長を考えさせてくれます。先日同窓会が開かれましたが、その意味でとても楽しかったのでそのときの話をしましょうか。

みんな、この目をととても楽しみにしていて、自分の原点を確認するように部屋の中を見て回っていました。ね。いつも、お母さんと一緒だった人が一人で来て、みんなの輪の中で青年の風貌で談笑している姿が見られたりしましたよ。

F A君は相変わらず人の集まるには出て来ないで、二階の奥の部屋で以前の担任の先生に、お得意の管楽器の絵を小さなラップからチューバまでつぎつぎに描いてもらって、絵を通して対話していました。以前のようにひどく照れてしまわずに、描いてもらった紙を折って飛行機にして飛ばしていました。『ぼくはこうやって大きくなり、ここを飛び立っていったのだよ』と語っているように感じました。

『その日暮らし』について

M どの人もいま行っているところで安定しているけれど、ここに来ると昔の遊びをちよつとやってみるようです。自分を確認するのでしょうか。A君のお母さんの話によると中学に行つて、担任の先生が高圧的にA君を従わせようとしたときに、少し苦勞したけれど、本人がしつかりそれを表現するので、お母さんが思い切つて先生に話して分かつてくれるところは落ち着いているそうです。現在、A君は作業所で働いて

いるのですが、一日がすぐ過ぎてしまうので、お母さんはまとまったことは何もできないと言われましました。

F 私もA君のお母さんや二、三の人と『むかし、その日暮らしでいいって言われた』という話になりました。『その日暮らし』っていうのは、一般的には先のこととを考えないで生きている人のことで、否定的な意味にとられますね。でもここでは「この日を一生懸命に生きる」という励ましだと思ふのですが、先のことばかり心配しないでこの日のことを一生懸命やりましようという意味でしょうか。

M 聖書の有名な言葉に「その日の苦勞は、その日だけで十分である」とあります。いつも私たちのことを大切に見守っていて下さる方がいるから思い煩わないでという意味で、以前お母さんたちに話したのです。『その日暮らし』という日常の言葉で言つたのですが、お母さんたちは覚えていてくれたのですね。

『その日暮らし』を可能にするには……

子どものありのままを受け入れること

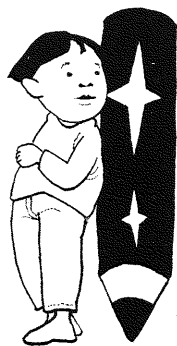
M N子さんのお母さんは一人で参加されたのですが、ゆつくり話していかれました。N子さんは弱視で難聴で、心臓の手術もされていたと思いますが、以前からの続きで生活はなかなか大変のようでした。食事が難しいこと、一晩に二、三回起き出してしまいうことなど話を聞いてみると、ついもつと楽にならないかと考えて助言したくなるのです。福祉サービスのシヨートステイに出しても世話があまり大変だから、何となくすぐ断られるそうです。将来を考えてせめてシヨートステイにでも行かれるようにと願っているそうです。でもお兄さんやお姉さんもそんな中から自立してちゃんとやっていますよ。

F それであなたは何て話されたのですか。実は、そのあと私がN子さんのお母さんに会ったらあなたに現状を聞いてもらって、とても気が楽になったと言われ

たんです。

M 私は話を聞いてこの人は大変な中でもちゃんとやっていると思ったので、「いまのままでもいいじゃないですか、N子さんは十分に満足して生きていますよ。あなたは自分のことを考えておいしいものを食べたり、時間を見つけてよく眠り、時には短いものを読んだり、考えたりして自分を大切にしてください」って言ったのです。でも、あの人はもうそうやっ

F 子どもの現実を受け入れることはどの親にとっても難しいことですね。私自身のことを考えても親つて



自分の子には欲張りだから……。子どものありのままを認めるとずっと自分にも優しくなれますよね。私はN子さんのお母さんに出会って、以前と変わらない穏やかな姿に言葉には出来ないような深い思いをもったのです。

N さんの記録を読んで

F 家に帰ってそれが何だったのか、そのころのことを書いたものを見てみたのです。私の著書の『育てる心の旅』（日本基督教団出版局 一九九〇）の六三頁にありました。

M 私の記録も見てみましょうか。卒業して十五年たちますから、幼児期のころから見ると十八年以上たつのです。

（膨大な記録の中から一九八八年五月―九月ころのものを出す。）大体同じころですね。

F 私がはじめてこの子と付き合ったときのことを書いたのですが、蒸し暑い日なのにビニールのレイン

コートを着ていてファスナーを閉め、暑いから下げようとする怒るのです。せめて袖口をめぐってあげようとしても袖口を引っぱって手が出来ないようにします。

M 九月の記録にはボタンをかけた外したりを三分もやって、私の指がいたくなると書いてあります。

同じ年の六月にはチョッキのファスナーを上げたりしています。Nさんがこのころ鏡をよく見ました。この人のファスナーへの関心は胸にある大手術のあとと関係があるんじゃないかと思っていました。それでNさんが度々鏡を見ることを記録したのだと思います。そうすれば自分の手術のあとを見ているでしょう、まるでファスナーのような傷跡を意識もするでしょう。

F ええ、私もあの傷には驚きました。本当にファスナーみたいですよ。きつと生命を脅かされるような出来事だったのでしよう。ご両親にとってはこの子が生きていることが心底ありがたいことだったのでしよう。だ

から人から見ると大変な生活でもやっていかれるし、大事にしているのでしょうか。十八年前には私はそのことには触れられませんでした。

M 八八年の九月の記録には、土曜日に「父と母が連れてくる」とあります。お父さんはいまま夜中に起こされ、朝の散歩にいっしょに行つてから会社に行くという事です。今日を大事に生きていることが分かりますね。

もう一つ大事なことは人と比べないこと

M 同窓会でO君の妹さんとゆつくり話していると、ろへお母さんが来て、大変楽しかったです。以前妹さんがO君と木に登っていたり、お兄ちゃんと仲がいいんですよ。

F O君は小さいころは学校へ来ると裸になつて走り回つて遊んでいましたね。

M 小さかったころ私がO君の裸を心配するよりも「いまは何もかまなぐり捨てて本気で遊ぶときだと

思う」とお母さんが言ったことがあります。

O君のお母さんは私が大学を辞めて養護学校の保育に専念するようになったことを、とても喜んでくれた一人です。「先生が最初に言われたことをいままはつきりと覚えていきます」と言われました。その第一は「いまを大事にすること」第二は「他人と比べないこと」と話されました。私はこのことをそんなにはつきり覚えていてくれることに感激して話し合いました。

F お母さんたちは子どもたちの卒業後、中学や、高等部や、作業所に行つて私たちとは違ういろんな育てられ方をした子どもを見ています。そのような経験の中から子どもを育てるうえで大切なのは子どものときによく遊ぶことと、子どもが納得して生活出来ることだ、と言われたことが特に心に残りました。

M 同窓会で原点を確認したのは子どもたちだけでなく、大人たちも互いに子育てについて学んだ日でしたね。
(保育研究者)

編集後記

子どもの育ちの支え手には、いろいろな人がいる。ずっと続けて世話する人と、時折、あるいはたまにだけ出会う人。続けて見ているようでも、実は、かならず「他人」に委ねざるを得ないのが保育であり、それで救われる面もある。この「他人」には当の子ども自身も含まれると言うと、極論だろうか。人に委ね責任をシェアしながら、自分にできることの際限を測り測りしているという保育者の図が浮かぶ。

久しぶりに再会した卒業生の親に「いまのままでいいんじゃないですか」と受容する保育者と、それで「気が楽に」なる親（津守先生）。

成長したわが子の言葉をヒントに、養成校の学生を理解し受け止めようとする奮闘する塚田先生。伊藤先生は「親性」とは「親とならない場合であっても、次世代の誕生と健やかな発達を支援する社会の一員としての備えていくべき資質」を含むものだという。「ラジオのおっちゃん」（庄籠先生）は自分では意識していないが、子どもたちの「親性準備性」を育てているとはいえないだろうか。

ドイツでメルヘンが反教育的だとして子どもから遠ざけられていた時代に「子どものためのメルヘンが不足している」と嘆く母親がいた（佐藤先生）ことに驚いた。子どもを教育の対象と考える以前に、生き生きとした好奇心や笑顔で輝く子どもの姿を見たいと願うというところに保育は始まるのではないか。（浜口）

幼児の教育

第一〇四巻 第五号

(二〇〇五年五月号)

定価五五〇円(本体五二四円)

発行 平成十七年五月一日

編集兼発行人 浜口順子

発行所 日本幼稚園協会

〒112-8620 東京都文京区大塚二-1-1

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108-8620 東京都港区三田五-1-1

発売所 株式会社 フレーベル館

〒113-8611 東京都文京区本駒込

六一-四一九

☎〇三-五三九五-六六一三(営業)

☎〇三-五三九五-六六〇四(編集)

振替 〇〇一九〇-1-19640

☆ 本誌ご購入のご注文は発売所「フレーベル館」をお願いします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

最新刊

“園だより”が織りなす
子育て支援記録 全1冊！

お父さんも
もっと子どもと
遊びたい！

あったか 家族の ファミリー DAY

—おやしパワーだ！
子育て支援—

渡邊 眞一・著

(横浜 初音丘幼稚園園長/
スカイハイツ幼稚園園長/
横浜保育室ピッコリーノ園長)

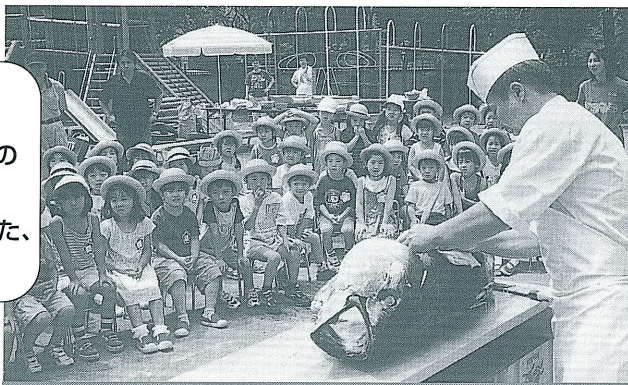
AB判 122頁 (カラー口絵4頁)
定価1,575円 (税込)

■文部科学省は平成16年度の政策課題として、“親と子がともに育っていく場として今こそ幼稚園の出番”と、新規の子育て事業「親と子の育ちの場」を創設しました。そしてこの事業の一つに“父親の保育参加”があります。ここには幼稚園がもっている親と子の育ちの場という機能を十分に生かし、子育ての喜びを感じてお互いの成長につながっていくような活動を、幼稚園ならではのものとして取り組んでほしい・・・との願いが込められています。(本書まえがきより)

■子育て支援事業を、真摯に考える関係者すべてにおくる格好の実践書。

本書の特徴

- 子育て支援記録全1冊
- 過去6年間の実践記録のすべてを網羅
- “園だより”を中心にした、具体的な内容構成



キンダーブックの

フレール館

くわしくはフレール館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

「パワーアップ保育SERIES」第7弾!

最新刊

折り紙
初心者に
最適!

かんたん基本折りから夢が広がる!

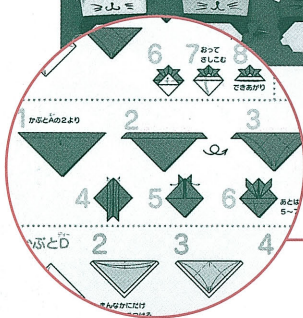
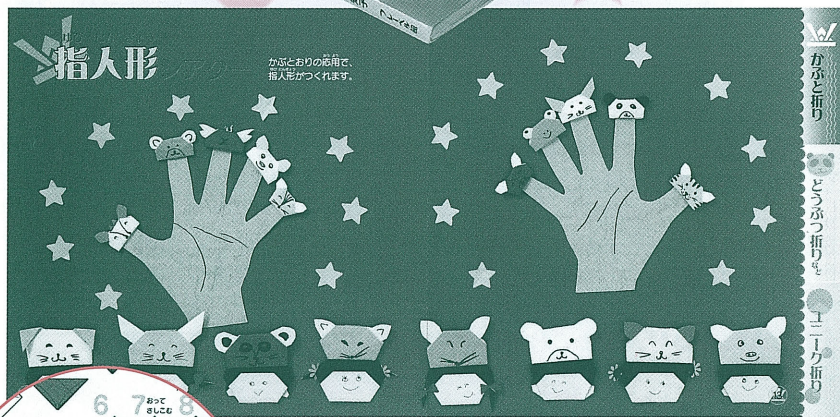
おりがみワンダーランド

かぶと折りほか編

川並知子著



17×18cm 48頁
定価998円(税込)



カンタン!
わがりやすい!
折り方説明。

子どもと保育者がいっしょにつくって楽しめる折り紙のアイデア集「おりがみワンダーランド チューリップ折り編」の続巻。「かぶと折り」など、複数の基本折りを展開させ、新しい世界を創造していきます。

『おりがみワンダーランドチューリップ折り編』

川並知子著 / 定価998円(税込)も **好評発売中!**

キンダーブックの

フレール館

くわしくはフレール館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

定価 五五〇円(本体五二四円) ☆